東方魂劇場

負け犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方魂劇場

【Ｎコード】
Ｎ３５５４Ｗ

【作者名】
負け犬

【あらすじ】
普通の女子高生の永江衣玖は、喪服の少女と出会うことで変わっていく

「東方」と「ＢＬＥＡＣＨ」の二次創作になり損ねました。
素人投稿・不定期・原作崩壊・キャラの死亡・失踪の可能性あり
全部許せる人は見ても大丈夫だと思います。

※９月５日追記

上記にある「なり損ました。」というのは、始めは2作品の二次創作を目指したのですが、「東方」がメインで「ＢＬＥＡＣＨ」がほとんど無くなってしまいました。
「ＢＬＥＡＣＨ」のキャラは登場せず、斬魄刀の様なもの、服装、霊力の概念が登場するのみとなっております。

０１話（前書き）

初めて小説書いてみました。
いろいろ許せる人だけ見てください。

あ、文章がおかしいとか表現が変とかあればどうぞ叱ってください。
喜びます。

01話

深夜　暗く静かな街中

「オ〝オ〝オ〝オ〝オ〝アアアア！！」

大量の異形が少女を囲んでいる。その数は５０以上　対する少女は一人。

「はっ…はっ…はっ…はっ…！」

少女は乱れた呼吸を整えながら、背丈に比べると明らかに不釣合いな長刀を左手で構える。外見は１４～１５歳位の女の子　真っ白なショートカットに緑色のリボン　黒い喪服のような服を着ている。

５体の異形が少女へ飛びかかる。

「グギ！」「ギャッ！」

２体が少女に斬られて地面に伏し、黒い粒となって消えた。残りの３体うち、２体は翼を生やし空へ逃げた。１体は少女の背後に回り込み背中を貫こうと鋭いツメを伸ばす。

「ギャ！」

少女が消えたかと思うと空中にいる２体の異形が斬られて地面へ落ちていく。

「はぁっ！　はぁっ！　はぁっ！」

この機を逃すまいと、周りを取り囲んでいた異形が一斉に少女へ飛び掛る。瞬間、少女は懐から”鍵のような物”を取り出し、叫んだ。

「楼観剣！」

刀の形が変化する。長い刀身はさらに長さを増し、霊気を帯びて強い光を発していた。一閃すると異形の群れの３分の１程度が黒い粒となり消えた。

ーーーーーーーーーーー

少女が地面に横になっていた。意識を失っているわけではないが、ひどく消耗し動けずにいるのだ。

「まずい、このままだといずれ・・・・・・」

深夜　暗く静かな街中、戦いに気付く者は誰一人いなかった。

ーーーーーーーーーーー

「衣玖、放課後カラオケ行こうよー」

「え、また？」

「だって、やっとテスト終わったんだよ？自由の身なんだよ？ねぇ、付き合ってよー」

マコがいつもの様にカラオケに誘ってきた。

朝倉麻子　小柄で肩にかかる程度の少しだけウェーブがかかったセミロングが特徴的。彼女はカラオケが大好きなのである。一週間に一回は誘われているだろう。

私も嫌いじゃないけどさすがにそんな間隔で行きたくはない。
ときどき行くから楽しいのに

「私昨日徹夜してるからすごい眠いんだけどなぁ」
「すごいね！　私なんて昨日3時間も勉強するつもりだったのに30分で眠くなって寝ちゃったよ」
「……」
「あ…あはは……」
「ま、いっか。確かに息抜きしたいし。うん。行こっか。マコ」
「！　うん！　やっぱり衣玖は優しいねぇ。じゃぁ放課後ねー」

マコは自分の席に戻っていった。

ーーーーーーーーーーーー

「あ、早苗さん？今日マコにカラオケに誘われちゃって。・・・・うん。あんまり遅くならないようにします。・・・・はーい」

ケータイを閉じて席を立とうとしたらマキが駆け寄ってきた。どうやら見られていたようだ。

「今の早苗さん？」
「うん。最近変な事件多いしね。連絡しておかないと心配しちゃうから」

連続変死事件　通常の殺人事件に比べ、特徴的な点が3つある。
まず死体の状態。5日程前にまるでダンプカーに轢かれたようなペシャンコな成人男性の死体が発見された。それ以降普通ではありえない殺され方をした被害者が続々と発見されていた。血を抜かれた死体。体を変な方向に折り曲げられた死体。手足を切断…ではなく、

引きちぎられている死体など・・・・・・まるで”怪物に襲われたかのような死体”が今までで8体ほど見つかっている。
2つ目は殺害された時刻。死体の状態から見て、全て深夜に殺害されている可能性が高いらしい。
そしてこの事件は全て

「たしか守矢町だけで起きてるんでしょ？」

マコの顔に不安の色が浮かぶ。
（・・・しまった。こういうの苦手だったっけ。空気読め私）
マコは怖がりである。中学生の時なんとなく怪談を話して聞かせたら、泣き出してしまったのを今でも覚えている。ましてや殺人事件が自分の住んでいる町で行われているのだ。怖くないわけが無い。
……私だって怖い。

「ま、まぁ今日は楽しもうよ。せっかく遊びに行くんだし。」
「うん。そうだよね。」

直後、もっと気の利いた言葉をかけてあげればよかったと後悔する。
永江衣玖はあまり空気が読なかった。

ーーーーーーーーーーー

「お、衣玖ちゃんいらっしゃい！」
「すみません。お世話になります。」

小型カラオケ店「フィーバー」のフロントでマコのお父さんの達也おじさんに挨拶をする。お店であり、マコの家でもあるのだ。

「どうせ麻子に無理やり連れてこられたんだろう？　付き合ってく

れてありがとうね」
「いえそんな、こちらこそいつも部屋使わせてもらってすみません。」
「いいのいいの、どうせお客さんなんか来ないんだし」
事実だった。商店街の隅にあるこの店はあまり人目につかない。料金は安いが、フード・ドリンクなどのサービスは無く、自販機のみ置いてある。それでもこの店を見つけて入店する人はときどきいるのだが、その店の唯一の従業員の達也おじさんは……
身長１９０ｃｍ以上の長身。筋肉質な体格でスキンヘッド。正直見た目が怖すぎるのだ。私は慣れたけど。

「麻子、ちょっと」
「？？」
「まったくお前は…衣玖ちゃんを無理やり付き合わせて…」
「……」
「よくやってくれた！　さあ、この千円札で好きなだけ飲み食いするがいい！」
「やったーわーい、えへへ」
いつも通りだった。
ーーーーーーーーーー
「疲れた・・・ねむー」
２０時　衣玖は我が家に到着した。
「ただいま」
「おう、おかえりー」

居間の方から返事が聞こえた。
ドアを開けると同時に軽い酒気が漂ってくる。先ほどの返事の主がテーブルに頬杖をついてテレビを見ていた。いつもの５００ｍｌの缶ビールが３本テーブルの上に置かれている。そのうち２本はすでに空だろう。
彼女の名前は八坂神奈子さんこの家の大黒柱である。寝巻きを着て頭にタオルを巻いている。どうやら湯上りのようだ。
私はソファに座り、少し落ち着く。台所から食器を洗う音が聞こえる。どうやら晩ご飯はもう食べ終わったらしい。ちょっとおなか減ったな。けど眠いし、食べてすぐ寝たら太っちゃうかな。などと考えていると、神奈子さんがテレビからこちらへ視線を移して話し始めた。

「楽しかったかい？」
「うん。達也おじさんも元気そうだったよ」

２人でテレビを見ながら今日の出来事を話す。そうしていると台所から早苗さんが「おかえり、大変でしたねぇ」と言って料理の乗ったお皿を持ってきてテーブルの上に置いた。
サーモンの薄切りとちぎったレタスを塩コショウで和えたやつだ。主に酒のつまみとしてこの家では結構定番である。

「ほら食え食え、おなか空いてるだろ。これ食べてもあまり太らんし」

神奈子さんがニヤリと微笑みながら言う。どうやら見透かされていたようだ。

「もー。私が作ったんですよー？　衣玖ちゃんよかったら食べてく

ださい」

早苗さんが少し膨れて言う。神奈子さんの娘　１９歳　スタイルが良く、料理、洗濯、掃除、何でもできる。そして少し緑色が混じった黒の綺麗なロングヘア。できすぎたくらい完璧な人である。

「いただきます」

一口食べてみる。おなかが空いていたせいなのかすごくおいしかった。それからしばらく3人でテレビを見ながらゆっくりと過ごした。

ーーーーーーーーーーー

「衣玖」

名前を呼ばれて意識が飛んでいたことに気づいた。
時刻は２１時　普段であればまだまだ起きていたい時間なのだが、今日は自分が思っている以上に限界らしい。

「ふわぁ…もう寝ます。おやすみなさい」
「おう。大変そうだなぁ。おやすみ」

２階の自分の部屋に入る。
着替えもせずベッドに横になりながら振り返る

私のフルネームは永江衣玖。６歳の頃、孤児院から八坂家に養子として引き取られた。普通であれば引き取られた養子は親の性を名乗らなければならないのだが神奈子さんはそうはしなかった。何とかして元の永江の姓のままにしたらしい。なにか意図があるのだろうと思う。ある程度物事が理解できるようになった今では、まるで本

当の家族の様に接してくれるこの家の人、家族に感謝している。
この家は博麗神社と呼ばれている。鳥居にもそう書いてあるし、郵便物も博麗神社という建物名で届く。
けれど神社として活動はしていないようだ。昔、神奈子さんにどうして神社に住んでいるのか聞いたことがある。曰く、潰される予定だったところを引き取って住むことにした。住居部分を追加して、鳥居や賽銭箱は、捨てるのもかわいそうだから残しておいた。・・・・・・ということらしい。

「ォォオオオオオ……」

！　まただ、今夜も聞こえる！

初めは六日前の夜。獣の鳴き声、咆哮の様な音が聞こえた。動物にしては今まで聞いたことの無い声だったので不思議に思った。次の日の朝、ニュースでペシャンコになって死んでいた成人男性のニュースが流れた。
その日も深夜に咆哮のような音が聞こえ、次の日の朝には新たな変死事件のニュースが流れていた。衣玖は恐怖により、毎夜眠れぬ夜をすごした。そして今日に至ってもまだ繰り返されている。

「もう……こんなの嫌だ」

衣玖は恐る恐る窓のカーテンを滑らせて外の様子を確認する。

「う、うそ……なんで…！」

窓から見える路地
そこに刀を持った白髪の少女が血だらけで倒れていた。

０２話（前書き）

早くバトル展開書きたい

02話

しばらく呆然と見つめていた。が、我に返る。衣玖はあわてて駆け出した。

ドアを開けて階段を駆け下りる。急いで靴を履き玄関のドアを開ける。路地へ出るまでの距離が長い。倒れている少女の居る場所へ行くには、まず路地へ出る必要がある。そして神社の外周にある塀沿いに回り道をする必要があるのだ。
やっと少女を確認できる”はず”の路地まで来た、が、何も見えなかった。そこに誰かがいる気配が無い。
暗くてよく見えない。とりあえず少女が倒れていたところまで駆け寄ろうとした。

「おまえは何者だ」

一瞬何が起きたかわからなかった。今衣玖は右手を後ろ手に押さえられ、左手も前方へ投げ出したまま掴まれて体全体を地面に押さえつけられていた。・・・・・動けない。

「知能はあるはずだ。人に化けられるんだからな。言え、何者だ。」

口を開くことが出来ない。息をすることさえ出来なかった。空気が全身を押しつぶそうとしてくる気さえする。視界が霞み、意識が遠くなる・・・・・・

「え？この霊力って・・・・まさか！」

急に体が軽くなる。声の主が飛びのいたからだ。飛びのいた先に居

るのはやはりあの倒れていた少女。驚き、動揺した様な顔でこちらを見つめていた。

「はぁ、はぁ、うえ〝え〟！」

「あ、ご、ごめんなさい！　大丈夫ですか！？」

正直、大丈夫ではない。血だらけで倒れている女の子を見つけたから心配して急いで駆けつけたらアームロック。急いでいて息が上がっているのになぜか呼吸もできなかった。今考えるとひざを背中に乗せて動けないようにされていたかもしれない。ものすごく背中が痛い。そうじゃない、今はそれより・・・

「うえ〝え〟・・・はー・・・はー・・・」

涙が出る。なにこれすごく気持ち悪い。物心付いてからさっきまで「吐き気がする」という感覚がよくわからなかったが、なるほど、こんなに苦しいものなのか。

それにしても、あの押しつぶされそうになった感覚。あれはなんだったんだろう。

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、や、やっと落ち着いてきた・・・」

「あの、本当にごめんなさい・・・」

血まみれの少女は本当に申し訳無いという顔で謝罪の言葉をかけてくる。

この少女は何なのだろう。顔立ちや体格から見て中学2，3年生だと思う。

髪はショートヘアで真っ白に染まっている。肌も透き通る様な白色だ。外国人？　・・・いや、さっきからかなり流暢な日本語を喋ってないか？　ハーフなのだろうか。

それから服装。どう見ても喪服に分類される服だと思われる。白い髪と白い肌に黒い喪服というのは、けっこうイケてると思う。が、どう考えても普通の服装ではない。最近喪服が大人気！なんてことは聞いたことがない。っていうかあれ、刀？まさか誰かと真剣で殺し合いでもしていたのか？

ツッコミどころ満載であるが、とりあえず質問してみる。

「あの、どうして血まみれで倒れ」

「すみません。ちゃんと説明しますから、ちょっと移動しましょう。」

「あっ・・・」

今二人の間には、特有の匂いを放つ小さい水溜りが出来ていた。

「ちょっと待って」

「？」

近くにある自販機で水を買い、壁際で軽くうがいをして、余った水でさっきの嘔吐物を流した。これで少しはごまかせただろうか。

「とりあえず近くの公園まで行きましょうか……？」

少女はなぜか自動販売機を見つめていたが、すぐにこちらに気づいた。

「す、すみません。行きましょう」

ーーーーーーーーーーー

公園に着いた。誰一人おらず、虫の鳴き声が少し聞こえる。近くにベンチがあったのでそこに座る。少女に隣に座る様に促す。だが少女は衣玖の前へきて　土下座をした。

「本当に申し訳ございませんでした」

「ちょ、ちょっと！？」

衣玖は困惑した。確かに地面に押さえ付けられて変な疑いをかけられたのだから一言や二言言いたいことはあった。だがこんなに直球で謝られてしまっては、何を言えばいいかわからなくなってしまう。

「大丈夫ですよ。怪我は無いし、もう気にしませんから。だから土下座はやめて下さい」

「すみません。」

そう言いながら少女は顔を上げる。

本当は背中がかなり痛いけど我慢しておこう。

「それより心配なのはあなたですよ。そんな血まみれで……私はあなたが倒れているのを見つけて心配で近づいたんです。いったい何があったんですか？教えてください」

「わかりました。なるべく簡単に説明しますね。けどその前に自己紹介させてください」

「私は魂魄妖夢。幻想卿に住むキャラクターです」

幻想卿？　キャラクター？　よくわからない単語が出てくる。とりあえず自己紹介をしておく

「私は永江衣玖よ。気になることはたくさんあるけど……とりあえ

ず話を聞いていれば一通り教えてくれると思っててていいの？」
妖夢は「はい」と答えると話を続けた。
「幻想卿というのは、私のようなキャラクターが住む世界です。この世界に住んでいる様な生きた人間はいません。キャラクターというのは幻想を具現化して戦う者のことです」
からかわれているのかと思ったが、少女の目は真剣である。
「私は妖怪退治の為に現世に来ました。最近殺人事件があったはずです。あれは妖怪の仕業なんです。妖怪は霊力を持たない普通の人間には見えません。あなたなら妖怪の声が聞こえたはずですが。あ、ちなみにこの世界のことを私たちは現世と呼んでいます」
少女が矢継ぎ早に言う。今度は言っている言葉の意味はわかる。だけど簡単に信じられる話ではない。
「まさか能力を持つ妖怪がいるなんて思っていませんでした。不覚です」
「今回連れてきた妖怪は能力なんて持ってないわよ」
「なっ！」
声がどこからか聞こえた。だがあたりを見回してもそれらしい人影は見当たらない。妖夢も同じく辺りを見回しているが、どこにいるかわからないらしい。とりあえずベンチから立ち上がろうとする。
「そんなに警戒しなくていいじゃない」
「！　貴様！」
妖夢の刀が私の座っていたベンチの反対側を斬りつける。

今の声は右側、つまり隣から聞こえた。つまり、辺りを注意して見ていたのに、隣にいるのに気が付かなかったということになる。急いでベンチから離れて距離を取る。ベンチには誰もいなかった。

「上です」

妖夢に言われてベンチの上を見る。そこには金髪の少女が一人。空中に頭を下にして逆十字に浮かんでいた。一回転して真下のベンチに降り、腰をかけた。
体格は妖夢と同じぐらい。黒っぽい洋服に黒いスカート。ショートカットの金髪に光る金色の瞳。あの服装は妖夢の仲間なのだろうか。というかさっき浮いてたんだけど。

「……」
「そう睨まないでよ。怖いなー」
「黙れ」

妖夢からものすごい威圧感を感じる。どうやら仲間ではないらしい。それにしてもこの威圧感、私が地面に押さえつけられた時と同じ感じがする。

「大丈夫よ、邪魔しないから」
「……」
「幻想が増えるのは大歓迎よ。彼女をキャラクターにするんでしょう？　安心して、黙って見ているから」
妖夢はものすごく怖い顔でしばらく金髪の少女を睨んでいたが、諦めたようにこちらに意識を向ける。

「あれは大妖です」

「妖怪とは違うの？」
「本質的には同じだといわれていますが、強さがまったく違います。大妖は幻想の力をほぼ無制限に使うことができるんです」
「そうよ、私は大妖。大妖ルーミアよ。よろしくね、妖夢、衣玖」

ルーミアが自己紹介をしてきた。こちらの自己紹介のときから、すでに観察されていたらしい。敵意はまるで感じられない。それに、どう見ても人間にしか見えない。

「衣玖さん。すみません。本当はあなたに同意をしてもらってからキャラクターになってもらうつもりだったのですが、時間が無いようです」
「あら、時間ならあげるわよ。そうねー今から一時間ここから動かないから」
「黙れ！」
「もう。まあいいわ、私が決めた。一時間待つから早く彼女にキャラクターになってもらいなさい」

ルーミアはベンチに深く腰掛け、腕組みをした。
もしかしていい人じゃないかと思えてきた。
わかったことがひとつある。どうやら妖夢にしろあのルーミアって子にしろ、私にキャラクターというやつになってほしいらしい。

「衣玖さん」

妖夢がこちらを向いて話しかけてくる。どの程度かはわからないが、ルーミアのことを信用したようだ。

「先ほども言いましたが、キャラクターとは幻想の力を具現化して戦うもののことです。キャラクターは妖怪と戦う力を持っています。

その代わり妖怪のほうも幻想の力を求めて襲ってくることになります。

衣玖さん。あなたはキャラクターになる素質を持つ魂を持っています。私はあなたにキャラクターになってほしい」

02話（後書き）

「妖怪」……幻想の力を求めるもの。異形。キャラクターやその素質のあるものを襲い、幻想の力を奪おうとする。ときどき普通の人間を襲うこともあるが、ほんの少ししか霊力を持たないので普段はあまり襲わない。

０３話（前書き）

誤字脱字見つけたら、前の話でも直していきます。
もちろん内容を変えたりはしませんよ。安心してください。

03話

「初めに言っておきます。大妖は強い。今の私だけでは勝ち目は無いでしょう。私の見立てでは、あなたがキャラクターになってくれれば少しは勝ち目はある」
「少しはって…いったいどれ位なんですか？」
「……2割くらいでしょうか。…お願いします。キャラクターになってください。」

私は絶句した。確かに妖夢は血だらけで弱っている。妖怪というやつにやられたのだろう。
私がキャラクターになれば勝てるかもしれないと妖夢は言う。でも確立は2割？つまり勝てる可能性はあまり無いということになる。
それに妖夢を信用しているわけじゃない。あのルーミアという子も。
…そういえば！

「ねえ妖夢。仲間は助けに来てくれないの？　幻想卿って言うところにキャラクターがいるんでしょ？　もし来てくれれば私だってあなたの言うことゆっくり聞いてあげられる」
「それが……」
「…妖夢？」

妖夢は何か言いづらそうに黙っている。

「帰りたくても帰れないのよねー。そうでしょ。」
「…やっぱりお前の仕業だったのか」
「そうよ。その通り」

よくわからないが、ルーミアというやつに何かされて幻想卿に助け

を求めに行くということはできないようだ。どうしよう。もっと時間がほしい。ちゃんといろいろ教えてほしい。何でこんなことになったんだろう。

「貴方達を見ているともどかしいわね。いいわ。私が手間を省いてあげる」

「！」

ルーミアがベンチから立ち上がる。それと同時に妖夢も再び刀を構える。

「安心しなさい。1時間は攻撃しないって言ったでしょ？　さて、まずは…」

ズドン！　と、音がした。気がつくとルーミアの前に何かがいた。怪物とでも言うべきだろうか。人間ならあんなに巨大なのはありえない。黒くてよくわからないが、人間の体に比べて明らかに歪な形をしていた。

「あらその顔。やっぱり妖怪は見たこと無かったのね。これが妖怪よ」

「ガアアア！」

「うるさい」

ルーミアがそう言って上へ手を向けて振り下ろすしぐさをする。それだけで怪物…いや、妖怪はまるで溶けてしまったかのように崩れていく。その後には妖怪の残骸は無く、何事も無かったように地面が広がっている。

「失礼したわね。次ね。私の能力は闇を操る能力よ。」

そう言うと今度は手を左右に開く。するとルーミアの姿が見えなくなった。いや、ルーミアだけじゃない。ルーミアの周りが全て暗くなっていて見えない。すぐにその闇は薄くなり、消えた。
隣にいる妖夢を見ると、信じられないというような面持ちで、固まっている。かすかに震えている様に感じた。

「あなたが幻想卿へ帰還しようとした時、作った入り口は何故か暗闇で何も見えなかった。だから帰れなかったのよね？そうよ。それは私の仕業」
「くっ…」
「困るのよねー。キャラクターを見つける前に帰られたら。さて、今の貴方たちが選べる選択肢は２つ」

ルーミアは人差し指を立てる。

「まず１つ目。衣玖をキャラクターにして協力して私を倒す。半死と素人。勝ち目はほぼ無いと思うけど、もしかしたら何とかなるかもよ。」

やはり妖夢はかなり消耗した状態らしい。ルーミアは中指を立てて言う。

「２つ目。諦めて二人とも私に殺される。さあ、選びなさい。」

妖夢一人で倒すことなんてまるで不可能だったらしい。逃がす気なんてまったく無いだろう。

「あー…。言っておくけど、２つ目を選んだらすぐに殺すわよ。面倒くさいし。」

妖夢にたずねる。

「あの人が言っていることは本当なの？」

「…はい。悔しいですが、間違いありません」

「なら私、キャラクターになるわ」

「…感謝します。ではすみませんが、こちらへ来ていただけますか」

私は妖夢の方へ歩いていく。すると妖夢の姿が消えて

「ぐはっ！」

張り手、だろうか。いきなり妖夢に攻撃された。勢い良く後方へ吹っ飛ぶ。

「な！、なにするんで…すか……」

目の前には妖夢に担がれた私がいた。

「すみません。魂魄の状態になっていただきました。」

妖夢は何事も無かったかの様に言う。私はよくわからない恐怖に襲われた。

さっきまでこの二人の異様な威圧感に圧倒されて正常な判断ができなくなっていた。ちゃんと考え直せばもっといいと思える選択肢もあったのではないかと思えてくる。

ルーミアを見る。微笑んでいた。さっきのやり取りがそんなに面白かったのだろうか。

妖夢を見る。妖夢は少し離れた地面へ私を寝かせてこちらへ近づいてきた。無表情…いや、少し辛そうな顔をしている。やはり傷が痛

むのだろうか。それとも本当に私のことを心配してくれているのだろうか。
妖夢は懐から鍵のようなものを取り出した。
「これは”幻想の鍵”と言います。キャラクターの幻想の力を引き出すものです。」
妖夢は鍵を剣に添える。
「楼観剣！」
刀身が光り、形状が変化していく。元々長かった刀はさらに長くなる。刀身には青白い光の様なものがゆらゆらと漂っている。妖夢は刀を私の目の前に突き刺す。
「この刀は楼観剣。私の幻想の力です。あなたの魂は私の幻想の力に接することでキャラクターとして目覚めるでしょう。さあ、この刀に触れて下さい。」
私は何とか立ち上がる。なんだか息が少し苦しい。魂魄の状態というやつだからだろうか。
目の前の地面に刀が刺さっている。この刀からも何か威圧感のようなものを感じる。しかし、あまりいやな感じはしなかった。
「ご武運を」
「？　わかったわ」
右手でそっと刀の柄を握る。
ーーーーーーーーーーー

「…あれ？」

気が付くと青空の下にいた。地面は白い煙で覆われている。遠くを見回すと煙の無いところもある。そこに地面は無く青空が広がっている。

「え、これって……雲！？」

地面をつま先で蹴ると鈍い反動が帰ってきた。どうやら硬くは無いが、ちゃんと乗ることができるものらしい。

「ここ、どこだろう」

「知りたいの？」

「！」

後ろを振り返る。そこには…

「わ、私？」

「そうよ。」

自分がいた。黒いロングスカートに白い上着。羽衣が空中に浮いている。

「この霊気…半人半霊のものかしら。ああ、今は全身全霊ってところかしらね」

目の前の自分が良くわからないことを言う。

「あの、私キャラクターになりたいんですけどどうすればいいです

か？」
「？　なにそれ」
どうやら目の前の自分と同じ姿をした人はご存知じゃないらしい。
「良くわからないけど力を取り戻したいってことでいいの？」
「あ、は、はい」
「わかったわ」
どうやら協力してくれるらしい。
「あの剣士の霊力で来たとなると…こんな感じかしら」
そう言って目の前の自分は空中に手をかざす。すると光が集まり、一瞬で光る金色の剣になった。その剣をこっちに向ける。
「な、何するんですか」
「何って…こうするのよ」
ドン！
音がした。胸に金色の剣が刺さっている。血は出ていないが、とても苦しく感じられた。反射的に抜こうとする。
「衣玖、今度は自分の力でここに来なさい」
目の前の自分は悪びれた様子も無く言う。
…だんだん剣が抜けてきた。完全に抜けたと思った瞬間、意識が飛んだ。

ーーーーーーーーー

「天の帯刃！」

衣玖は金色に光る刀を手にしていた。

03話（後書き）

「キャラクター」…幻想の力を具現化して戦う者。幻想卿のキャラクターは全ても服である。幻想を求める存在である妖怪に常に狙われている。”幻想の鍵”で自身の中の幻想の力を引き出す。姿形は様々。

※9月6日追記
「この霊気…半人半妖のものかしら。ああ、今は半霊半妖ってところかしらね」
←
「この霊気…半人半霊のものかしら。ああ、今は全身全霊ってところかしらね」

なぜこんな間違いをしたし。直しましたすみません。

０４話（前書き）

けっこう東方×Ｂｌｅａｃｈの二次創作やってる人いるんですね。なり損ないのこの小説は無いと思うけど、ネタかぶりだけは気を付けないと。

０４話

「今日は楽しかったなー」
「それはどうかしらねー」
「！」

朝倉麻子は部屋でベッドに座り、独り言をつぶやいただけのつもりだった。
麻子の隣に小柄な女の子が座っていた。
背丈は１３０ｃｍ程度　長い黒髪に大きなリボンが付いている。青を基調とした洋服を着ていた。

「か、」

「？　なによ」

「かわいい！」

麻子は長い黒髪の少女に抱きつこうとする。しかし、すぐに床へ崩れ落ちた。

「少しくらい警戒しなさいよ。まあいいわ。あとはルーミアのところにコイツを持って行けばおしまいね」

ーーーーーーーーー

「へえ、それが貴方の幻想の力なのね。でも変な形の剣ね」

ルーミアがベンチに座ったまま笑顔で衣玖に対峙した。
衣玖は妖夢と同じく真っ黒の喪服の様な服を着ていた。そして右手には一振りの剣を握っている。
衣玖が天の帯刃と呼んだその剣は幅広で長めの長方形の形をしていた。一般的な刀剣よりノコギリと比べた方が形状は近い。刃の色は銀色。柄の部分は金色に染まっている。

「妖夢。私が剣に触れてからどれ位時間が経ったの？」
「ぜ、全然時間経ってませんよ。1，2分くらいです」
そう言って妖夢は桜観剣に手を伸した。その瞬間妖夢の動きが止まる。
桜観剣の霊力が回復していた。

「多分それ、私がやったわ」

妖夢が衣玖に行ったことは他者の幻想による精神世界への介入である。
それにより対象者は自分の幻想の源と対峙し、自身の力、能力を得る。
今回は妖夢の桜観剣により衣玖自身のの精神世界へのパスを開いた。
桜観剣はかなり消耗していたが、幻想という要素だけあればよかった。だから霊力は無関係のはずだった。
桜観剣は元の霊力を取り戻していた。

「回復系の力ですか？剣の形をしているのに…」
「いいえ、たぶん攻撃系よ。回復したのは多分私の中のヤツのせいね。ところで妖夢、確認したいんだけど。」
「何ですか」

「あいつ。ルーミアは悪いやつ。斬っちゃっていいのよね」
「そ、そうですけど」
空気の流れが変わる。
ルーミアはベンチに座ったまま動かずこちらを見ている。
「かかってきてもいいのよ？」
「妖夢、動かないで。私の体でも護ってて頂戴」
「ちょっと！」
衣玖はルーミアの方向に一直線に突っ込んだ。
「あら駄目よ。もっと頭を使って慎重に殺しに来なさい」
ルーミアはベンチに座ったまま、剣の軌道に合わせて片手を前に出した。

ーーーーーーーーーーーー

「目覚めたか」
「あの子、天の帯刃を上手く使えますかねぇ」
「使えない訳無いさ。衣玖の能力に合わせて作ったんだから」
「あれ？魂魄妖夢の霊力が復活してますね。やっぱり霊力を吸収し切れなくて分けちゃったんですよ」
「成りたての衣玖じゃ大きすぎたか。まあいいさ、これで義理は果たした。後はあの子次第さ」

ーーーーーーーーーーーー

ルーミアに衣玖が衝突した瞬間、ルーミアはベンチごと空へ吹き飛

んだ。
ベンチがあった場所に衣玖が立っている。
（止めたと思ったんだけどなぁ。周囲の空気ごと吹き飛ばしてきた。そうか、この子そういう感じの能力なのね）
ルーミアは空中で笑っていた。
「ぜんぜん痛くなさそうね」
「そうよ。もっと全力できなさい。」
衣玖はルーミアに向かって一直線に飛んで行く。
「挑発に乗らないで下さい！いったん退いて！」
ルーミアを斬ったと思われた瞬間、周囲が闇に覆われた。
ーーーーーーーーーーー
（確かに暗いけど全く見えないって訳じゃないのね）
衣玖は暗闇の中にいた。ルーミアを斬ったと思ったらいきなり周囲が暗くなり、ルーミアの姿が消えてしまったのだ。
（斬った感覚は無かったから多分逃げられたのね。どうしようかしら）
衣玖は天の帯刃を手にした瞬間に、自分の能力をおよそ理解していた。簡単に言うと周囲の空気を把握、変化させる能力である。
初めに感じたのは妖夢の感情だった。ルーミアの能力に対する恐怖、

絶望。痛い、死にたくないという思い。だからあえて流れ込んできた霊力の一部を桜観剣に移し、戦闘に参加させないようにした。

「どう？怖い？あはは、このまま観察してようかしら」

衣玖は少し考えるそぶりをし・・・

素振りを始めた。

前方に素振り、後方に素振り、左右上下に素振り、多方向へ素振りをしている。

「貴方馬鹿？そんなことしても当たるわけないじゃない。からかってるのかしら。殺すわよ」

いきなりルーミアが現れて長いツメを振り下ろしてくる。なんとかそれを回避して距離を取る。振り返るとルーミアが立っていた。やはり笑っている。

「なぜ出てきたの？隠れていれば有利だったのに」

「貴方が可哀想なことを始めたからよ。アレは何なの？そんなんじゃ私に当たらないわよ」

「そんなこと知ってる」

「・・・ふざけてるの？死にたいなら殺してあげるけど」

「殺す殺すってうるさいな。早くかかって来たら？」

闇が濃くなり、自分自身も見えなくなる。

ルーミアが衣玖の後ろへ回り込み手刀で背中から刺そうとした瞬間、天の帯刃から白い閃光が走った。

ーーーーーーーーー

上空に夜空とは明らかに違う黒い球体が浮いている。

魂魄妖夢は衣玖の体を後ろに寝かせ、その球体を黙って見つめていた。血まみれだった体は、回復した霊力によって傷、服に至るまで治っていた。

妖夢は困惑していた。

最初にルーミアを見たとき、消耗した自分では絶対に勝てないと思った。衣玖と協力すれば勝てるかも知れないと思った。だがルーミアに能力を見せられたとき、勝ち目が無いことを確信した。闇を操る能力は近接戦闘に長けた妖夢にとって最悪の能力だったからだ。だから衣玖に望みを託した。もし衣玖がルーミアに有利な能力に目覚めたら、この身をかけてでも盾になり、勝ち目を作ろうと決めていた。

だが訳のわからない間にキャラクターとなったばかりの衣玖だけがルーミアと対峙し、自分は霊力を回復させてもらった上に安全なところで休んでいる。

妖夢は自分が情けなかった。

「あ！」

黒い球体に白い閃光が走る。それは衣玖が生きて戦っている証だった。

妖夢は黒い球体に向かおうとしたが、足手まといになることを恐れて動けなかった。

「あれ、加勢しないの」

「！」

気が付くと前方に小柄な女の子が浮いていた。少女を両手で抱えている。

「お前・・・大妖か！」

「そう。当たりよ。あ、ちょっと待ってね」

そう言うと少女を地面に寝かせて近づいてくる。

どうやら人間の霊体の様だ。

（なんで大妖が2体も・・・！）

妖夢は剣を構えて叫ぶ

「来るな！」

「来るなと言われれば行かないわよ。私戦う気無いし。自己紹介くらいはしてもいいわよね」

「私はスター、大妖スターサファイアよ。スターって呼んでね。貴方は・・・まあ教えてくれなくてもいいわ」

「・・・魂魄妖夢だ」

「あら嬉しい。素直な子ねえ。よろしく妖夢」

「・・・・・」

妖夢は必死に考えていた。

大妖が出現した場合、討伐隊が編成される。妖夢も例外ではなく、何度か討伐隊に参加して大妖と戦ってきた。

大妖は人格を持っており、荒っぽい性格のものが多かった。だから今回の様なルーミア、今目の前にいるスターサファイアの様な性格のものは珍しかった。例え、表面上だけだったとしても。

何とかして会話で戦闘を回避できないか。そう考えていた。

「ルーミアに怖い顔だって言われたでしょ。切羽詰ったような表情、あたしはその顔好きよ」
「・・・」
「どうせ何とかして私達から逃げる算段でも立ててるんでしょ？　・・・あのね。ルーミアはともかく私は本当に戦うつもりは無いのよ。あの子をルーミアに預けたら帰るわ。夕飯作らないといけないし」

あの子？あの地面に寝かせた子？
妖夢は霊力を探ろうとする。

「キャラクターよ。目覚めてないけどね」
「！」
「でもきっと弱いわね。はずれクジを引いた気分よ」
「どうするつもりだ」

ドン！

空で轟音が響いた。

「衣玖さん！」
「ルーミア」

傷だらけになった衣玖とルーミアが地面へ降り立った。

０５話（前書き）

０１話から読み直してたら誤字ひでえ。
気付いたらすぐ直していきます。ごめんなさい。

05話

「はっはっはっ」
「…」

衣玖は肩を上下させて呼吸をしていた。致命傷は無いが、服はボロボロになりとても消耗していた。
一方ルーミアは同じく消耗している様子だが、息一つしていなかった。

「あら、スター。連れて来てくれたのね」
「うん。けどこいつきっと弱いよ。私もう帰るわ」

そう言うとスターサファイアの前方に魔方陣が展開され、四角い入り口のようなものが出現した。
大きさは一般的なドアと同じ位で、内部は赤い光を放っている。

「妖夢、あいつも大妖なの？」
「はい。その様です。ですが何か様子がおかしいんです」
「何かされたの？」
「いえ、キャラクターの素質のある魂を連れて来て…」

（魂？）

衣玖は周囲を見渡す。すると地面にパジャマを着た少女が一人寝転がっていた。

「マコ！」

衣玖は麻子に駆け寄ろうとしたが、一足早くルーミアは麻子の前で待ち伏せていた。

「どけ！」
「落ち着きなさい。」
「うるさい。どけ！」
「知り合いなの？困ったわね。少なくとも一人は欲しいんだけど」
「訳のわからないことを！」

衣玖は焦っていた。
キャラクターになってから衣玖は調子に乗っていた。通常では考えられない身体能力、幻想の力を得て、毎夜の睡眠不足の原因と直接対決することができた。一種の吹っ切れた状態である。
だが今目の前で友達のマコが殺されるかもしれないという状況になり、目が覚めた。
行動の一つ一つがマコの危機に繋がると考えると、腕が震え、足が硬直し、動けなかった。
空気が変わる。

「衣玖さん。あのもう一人の大妖は本当に帰りました」
「…」
「あの人、知り合いですか？」
「友達よ」
「そうなんですか」

妖夢は剣をルーミアに向けて構えた。

「はあ。予想外だったわ、こんなにやるなんて。本当は私だって貴方達の誰一人殺すつもりは無いのよ。面倒だから力づくで連れて行こうと思ったけど、気が変わったわ」

「連れて行く、マコを？」
「そのつもりだったわ」
ルーミアは麻子に手をかざした。
「確かに弱そうねえ。はっきりはしないけど、多分戦闘向けじゃないわ」
そう言うとルーミアは心底残念そうにため息を漏らす。
「貴方達、いえ、どちらかでもいい。この子の代わりに私と魔界に来なさい。一緒に魔界を潰しましょう」
ルーミアは笑っていなかった。

ーーーーーーーーーーー

「おやおや、戦いは一段落着いたようだねぇ。気付いたかい？」
「それを私に聞くんですか？もちろんですよ。大妖の一人はいなくなりましたね。多分帰ったんでしょう。交戦していたキャラクターと大妖はどちらもかなり消耗していますが、生きてますね。少し前に回復したキャラクターと人間の魂はまだ変わりありません。」
「当たりだよ。さすがだねぇ。この装置も正確みたいだ」
「本当にいいんですか？助けなくて。この大妖かなり手を抜いてるみたいですけど。本気になったら多分すぐに殺されちゃいますよ」
「そうだねぇ…それじゃ様子を見てきてくれるかい？美鈴」
「わかりました。にとりさん」

ーーーーーーーーーーー

「意味わからないでしょ？大丈夫、説明するわ。黙って聞いてなさい。」
「まずマコから離れて」
ルーミアはやれやれという様な仕草をして、その場から距離を取った。
衣玖はマコのもとへ駆け出した。
「マコ！…妖夢、どう？大丈夫かしら」
「問題ありません。外傷も無く、霊力も異常ありません。それより気をつけて下さい。剣を近づけすぎると、この子を不用意にキャラクターにしてしまうかもしれません」
衣玖は慌ててマコから手を離す。
「話の続きよ。いいかしら」
衣玖と妖夢はルーミアに向き直る。
「私はね。キャラクターの素質を持った魂をスカウトしに来たのよ。少しだけ気配を感じたんだけどどこにいるかわからなくてね。それで幻想卿のキャラクターをおびき出した。私たちより貴方達の方がそういうの探すの得意だろうから」
「だから、妖怪にこの町を襲わせたの…何人も殺したの！？」
「仕方ないじゃない。その方が手っ取り早かったんだから」
衣玖はルーミアをにらみつけた。
ルーミアは気にせず話し続ける。
「でも駆けつけたキャラクターは私以上に鈍くてね。妖怪を倒すだ

けで素質のある者に気付く気配も無いの。だからちょっとムカついてね。私の能力を少し分けた妖怪でこのキャラクターは殺すことにした。甘かったわ。もっと強化すればよかった」

「くっ…」

妖夢は悔しそうに唇を噛んだ。

「素質のあるものの探索は諦めてプロに頼むことにした。さっきのスターよ、このあたりを探してもらったの。でもまさか二人もいるなんてね。予想してなかったわ。」

「ちょっと待て、素質のある者を連れて行ってもお前たちにはどうすることもできないはずだぞ」

妖夢がルーミアに問う。

「どうしてそう思ったの？幻想に触れさせればキャラクターになるんでしょう？」

「だけどそんな話聞いたことが無い」

「とにかくこれが私がここへ来た目的よ。面倒そうだからその話は後ね」

ルーミアは本当に面倒くさそうだった。

「魔界…って言ってもわからないわよね。私みたいな妖怪の住む世界を魔界って言うんだけど、今ちょっと立て込んでてねぇ」

「内乱でもしているのか？」

「そう！そうなのよ。簡単に言うと、好戦的なグループとそうでないグループね。私は後者の方に所属してるわ」

妖夢は驚いた表情をしていた。
衣玖は話がわからず置いてけぼりになっていた。

「と言ってもまだ分裂はしてないんだけどね。近々魔界に幻想郷のコミュニティが全戦力で潰しにくる。それに合わせて分離する手筈なのよ。けど戦力が足りないの。だからお願い、仲間になってくれない？」
「ふざけるな！そんな話信じられない！」
「言うと思ったわ。衣玖、貴方も駄目？」

衣玖はハッとした様な表情をして我に返った。

（全然話が見えてこない…。魔界って何？　コミュニティって何？　わからない）

「聞いてるの？衣玖？」
「嫌よ…」
「そう。貴方もなの…それじゃあやっぱり貴方たち2人を殺して、そこの弱い人間の魂を持っていくしかないのかしら」

ルーミアは本当に残念そうに肩をすくめる。

「私が見たところ一番脈がありそうなのは妖夢ね。ねえ妖夢。こっちに来れば貴方の仲間だったキャラクターがいるわよ」

妖夢の顔色が変わる。

「ふふふ。気になるでしょう。…そうねぇ、確か藤原妹紅、鍵山雛、あと…そうそう、洩矢諏訪子がいるわ。もちろん私と同じグループ

よ」
「どう言うことだ。妹紅も雛もお前たちにやられて…」
「そうよ。私達が倒して捕獲したの。今は仲間だけどね。…そうよ、何も殺すことなんて無い。痛めつけて捕獲すればいいんだわ」
ルーミアから殺気が放たれる。妖夢はとっさに身構えた。
「衣玖さん。まず私が切り込みます。気を抜かないで…衣玖さん？」
「洩矢…諏訪子…どういう事？…」
昔、衣玖が養子に引き取られた時のこと。
よくは覚えていないが、神社へ住むことになった。そこにいたのが神奈子さん、娘の早苗さん。そして…神奈子さんの妹の諏訪子さん。八坂諏訪子さんだった。何故かこの家庭に父親はおらず、諏訪子さんは年のわりに背がすごく低くて子供っぽい顔だったのを覚えている。そして3人の中で一番私を可愛がってくれた。
けど神社に住み始めてすぐ、事故で亡くなってしまった。
「ルーミア…その諏訪子てどんな人なの…？」
「？…そうね。十年位前に来たわね。すごく小さい子。スターと同じくらいかしら」
「…八坂諏訪子の間違い…じゃないの…？」
「いいえ。そんな名前じゃなかったわ。どうしたの？貴方様子が変よ？」
妖夢は意を決したように衣玖に向き直った。
「衣玖さん。預かってもらえませんか？」
それは陰陽の形をした直径5センチ程度の紅白の玉だった。

「これは…何…？」
「通信機です。ルーミアの能力が解ければ幻想郷のコミュニティから連絡があるでしょう。それまで預かっててください。」
言っている意味が良くわからない。
「ルーミア、２つ約束してくれ」
「言ってみなさい」
（…何するつもりなの？）
「一つ　この二人には危害は加るな。二つ　私が戦う相手はあくまで大妖だ。絶対に幻想郷には敵対するつもりは無い」
「そんなことなの。いいわよ。そのかわり、…わかってるわね？」
「ああ、私を連れて行け」
「やった！嬉しい！そういうところ好きよ、妖夢」
妖夢はルーミアのもとへゆっくり歩いていく。
「衣玖さん。巻き込んでしまってごめんなさい。コミュニティにはここであったことを正直に伝えてください」
スターサファイアのときと同じく魔方陣の上に赤く光る四角い入り口が現れた
「大丈夫よ。約束は守るわ。もうこの町に用は無い。じゃあね衣玖」
「待って！まだ！」
「…ごめんなさい」

腹部に激痛が走る。ルーミアのもとへ歩いていったはずの妖夢がいつの間にか目の前にいた。
妖夢とルーミアが入り口へ歩いていく。衣玖はその光景を見ながら、意識を失った。

ーーーーーーーーーー

「やられちゃいましたか。けど死人が出なくて良かったです」
そう言うと背の高い女性は倒れた衣玖達のもとへ歩み寄った。

０５話（後書き）

「魔界」……　主に妖怪・大妖の住む世界。

「コミュニティ」……　幻想郷にある組織。全てキャラクターで編成されており、妖怪・大妖を退治している。

０６話（前書き）

文章ひどいなぁ

物語が一通り終わったら校正して作り直そうかしら。

06話

（く…く……える…）

声に気づき目を開ける。周りは白で統一されていて、自分だけしかいない。

（く…いく…い……き…いて…）

どうやら上の方から声が聞こえるようだ。空を見上げようとしたが、眩しくて目を開けていられない。

（いく…衣玖…よかった…やっと気づいてくれた）

空で間違いない。空にいる誰かが私に話しかけてる様だ。

（……空を見て…でも目は開けないで…貴方なら私に気づいてくれるはず…）

声の言うとおりに目を閉じて上を向くが空からの光が眩しい。

まぶたを貫通して視界を白に染め上げる。

（衣玖…衣玖……く…グス…やっぱり駄目なの…）

声が徐々に小さくなり始め、嗚咽が混じり始める。

左手に何か握っていることに気づく。

（なにこれ…鍵？…！　もしかして）

衣玖は天の帯刃の名を叫ぶ。

衣玖は喪服の様な真っ黒な着物を纏い天の帯刃を手にしていた。

剣で光を遮り、空に向かって跳躍する。

（う・・・グス・・・！　いく、衣玖！）

声が再び聞こえ始める。再び目を閉じると一つの光点が見えた。

光点を目指して進む。すると急に眩しくなくなり、周囲を見渡すことができるようになった。

（ここは・・・雲の上？）

もう一人の自分に会った時とそっくりの世界が広がっている。

遠くに巨大な建物が見える。衣玖はその建物の上空へ移動しようとした。

近づいてみると、見た目よりもさらに巨大なのかなかなか差が縮まらない。

しばらく飛んでいるとようやく建物の全体を見ることができた。

６枚の花びらを模した建物となっており、中心部分に塔のような物が建っている。

とりあえず塔の頂上を目指して飛んで行く。

大分塔の頂上に近づいた。そこには様々な色の巨大な台座が６つあり、そのうちの５つが輝いている。

（衣玖！こっち！）

輝く緋色の台座から声が聞こえた。
衣玖はその台座に近づいていく。
そこには人の形をした像が立っていた。
衣玖より少し小さい女性の像が剣を中心に突き立てて立っている。
剣だけが緋色に光っていた。
衣玖はその台座に降り立つ。

（やっと気付いてくれた。お願い衣玖。”私達”の天界を助けて。平和だった頃の幻想郷を取り戻して。みんなが協力して立ち向かえば、きっとなんとかなる）

「貴方は誰なの？私を知ってるの？」

（やっぱり覚えていないのね。衣玖、古明地こいしに会って。記憶を取り戻して）

キー……ン

急に耳鳴りがして空気が震える。空は暗くなり、台座が揺れる。

（衣玖！私に触れて！私の力を持っていって！）

衣玖は目の前の像に手を触れる。

「駄目ですよ」

背後から声がした。気が付くと胸に穴が開いている。
振り返るより意識が無くなる方が早かった。

ーーーーーーーーーー

「うわぁー！……あ？」

衣玖は目が覚めた。いつもの見慣れた部屋。自分のベッド。

「変な夢…ふわーあ」

衣玖は大きな背伸びをして時間を確認する。

（午前６時か。今日は土曜日だしゆっくりしてられるなぁ。…さて）

「あの、貴方誰ですか？」

衣玖はすぐ横でベッドにもたれかかって寝ている人物に質問を投げかけてみることにした。

ーーーーーーーーーー

ー　ルーミアが妖夢を連れて魔界へ続く入り口へ入った直後　ー

地面は白く塗りつぶされており、幅２０，３０メートルはあるかと思われる広さで、ずっと奥までまっすぐ伸びている。周囲は暗くなっており、何も見えない。

「さっき貴方が通った入り口はフォールゲート、そしてここが…」

「デグレートバイパスって呼ばれてるところだ。俺やテメエみたいな大妖だけが通ることを許された道だ」

妖夢は現世でルーミアの手からキャラクターとなったばかりの衣玖と素質のある魂を守る為、自ら大妖ルーミアの仲間となった。そして今ルーミアの拠点である魔界へ連れて行かれるところであった。連れて行かれると言っても拘束などはせずに付いて来いと言われただけであるが、逃げようとしても無駄だと言うことは妖夢も重々理解していた。そして魔界への通路で待ち受けているものがいた。ルーミアと同じ様に人の形をしているが、人間とは比べ物にならないほど巨大だった。数は3体。霊圧と口ぶりからして、3体全て大妖だろう。討伐でよく見かけるタイプだった。

（こいつらも大妖か…）

「どうしたよルーミア。ボロボロじゃねえか。キャラクターごときにそんなに苦戦したのかよ」

「オイオイ、そいつキャラクターだろ？何で生かして連れて来てんだよ。」

「そんなことしたら……どうなるかわかんだろ？」

ルーミアはため息を漏らす。

「どうなるのかしら」

「決まってんだろうが……これでテメエを殺す大義名分が出来たんだ。弱ったテメエは俺たちに殺されるんだよ！」

大妖たちはさらに一回り巨大になり、姿を変えた。

「言い残すことはあるかよ。ルーミア」

「そうねえ」

そう言うとルーミアはクルリと後ろを振り返って妖夢の方を向く。
「こいつらは名前も名乗れないただの大妖よ。こういうやつらは魔界にたくさんいるから、もし絡まれたりしたら殺していいわ」
「テメエ！調子に乗るんじゃねえ！」
ルーミアは妖夢の方を向いたまま攻撃をかわす。
「妖夢、よく見ておくのよ。私は大妖ルーミア。二つ名は闇のルーミア。そしてこれが自身の名を語れる大妖の力よ」
「見えない月面（インサイドオブムーン）」
周囲が闇に染まる。
闇が消えて現れたのは黒衣を纏って黒い剣を手にしたルーミアだった。
先ほどの大妖は一体残らず首をはねられていた。
（凄い。こんなに凄いのを使われたら勝ち目が無いじゃないか）
妖夢は現世の戦いではルーミアが手を抜いていたことを察し、ぞっとした。
不意にルーミアの黒衣と剣が消えて、さっきまでの洋服に戻る。
服は完全に直っていた。
「今のは”ドレス”　自身の名を知る大妖が使える、幻想を身に纏った姿よ。よく覚えておきなさいね。貴方も使うようになるかもしれないんだから」
「それはどういう意味だ。ルーミア」

「てい」
「痛い！」
おでこに激痛が走る。どうやらでこピンをされた様だ。おでこを押さえる。
「私のことはルーミア様よ。魔界に入ったら言葉遣いに気を付けなさい。私のためじゃなくて貴方の為にね。さあ、行くわよ」
ルーミアは奥へ進んで行く。
妖夢はその後を追いかけていった。

ーーーーーーーーーー

「あ、おはようございます。ここ何処ですか？」
目の前の不法侵入者は悪びれず答えて起き上がった。
髪は長い。赤く染めているようだ。
服装は白いハイネックのシャツと黒いジーンズだった。
スタイルはかなりいい。身長は１７０ｃｍ以上あるだろう。足も細い。そして何より胸が大きかった。
「あ、あー…しまった。そうか。寝ちゃったんだ…」
どうやら事態を把握したらしい。
「あの、正直に話してくれれば警察呼びませんから。どうして私の部屋にいるんですか？」
「えと、その前に……」

「？」
「怖い夢でも見られたんですか？泣いていたみたいですけど」
言われて気付いた。目をこすると確かに水気がある。
近くにあるティッシュでふき取った。
「えーと、昨日の夜のこと覚えてますか？」
昨日の夜？
昨日はマコとカラオケ行って疲れて帰ってきて…
その後……！
「思い出したみたいですね。貴方は大妖にやられて気を失ってしまったんです。あ、正確に言うと寝返ったキャラクターに、ですかね」
「妖夢は寝返ったんじゃない！　私達を助けるためにわざと犠牲になったのよ…そうだ！マコは！マコはどうしたの！？」
「落ち着いてください。私だって気の流れで仕方なく向こう側に行ったことはわかります。言い方が悪かったのは謝ります。一緒にいた霊体はもとの体に戻しておいたので安心して下さい」
どうやら昨日の戦いを見られていたらしい。
「そのマコって子をもとの体に戻してから貴方にいろいろ説明するために待ってたんです。けど…」
「けど？」
「寝てる人を見ると眠くなりますよね」
（ああ、そういうことか）
「ま、まあ、せっかく起きられた事だし、後でゆっくり話しましょ

う。ここを尋ねてきて下さい」

そう言うと紙切れを取り出す。住所が書いてあった。

「あの、これ何…あ！何してるんですか！？ちょっと！」

紙切れを見ている隙に、赤毛の女性は窓から逃げ出した。

０６話（後書き）

「ドレス」……名のある大妖が使うことが出来る幻想の武装
姿、形状、能力は使う大妖によって様々

０７話（前書き）

プロットまとめたデータ失くした

07話

「ココ…？こんな店あったの？」

衣玖は立ち尽くしていた。

町から少し離れた所にずっと前から工事中のビルが建っていた。
昔は工事の音が響いていたのを聞いたことがある。が、ここ数年は物音が無く、中止されたようだった。
衣玖はたいして興味も無かったので、ここ数年はもうこのあたりに近づくことは無かった。

今朝、何故か自室にいた（不法侵入ともいう）スタイルの良い謎の女性に住所が書かれた紙切れを渡されて、馬鹿正直にその場所へ来たのだ。そこは工事中だったビルの裏側であった。

ビルの一部を買い取ったのだろうか。まるでそのビルの一、二階部分を抉り取った様に工場の様な設備はそこにあった。４分の３は大きなシャッターで覆われており、残った部分は事務所の様な作りをしていた。

シャッターの上には「河城大型模型」と書かれていた。

（私の知ってる模型店と大分違う…）

衣玖は深くため息をつき、諦めてチャイムを押した。

ーーーーーーーーーーー

「八雲紫様。第一攻撃隊隊長のレミリアです。入室してもよろしいでしょうか」
「どうぞ」
「では、失礼いたします」

広大な建物の一室に女性が一人、正座で背の低い机に向かい書き物をしていた。
床は畳、壁際には一本の掛け軸と生け花、中央の庭へと通じる出入り口は障子で遮られており、草木と小柄な少女のシルエットが写っていた。

先程の声の主はそっと障子を開けると正座をして両手を畳に付けて挨拶をした。

外見は年端も行かない少女である。しかし立ち振る舞いのせいだろうか、凛とした顔立ちのせいだろうか、なんとも言えない気品と威厳が感じられた。黒い西洋の洋服に真っ赤な羽織を纏っていた。
女性は書き物の手を休めてレミリアに向かい合う。

「いつも言っているでしょう。そんなにかしこまらなくてもいいんですよ」
「いいえ。私は紫様の部下です。これ位は当然です。」

紫様と呼ばれた女性はため息を付いた。

「何か動きはありましたか？」
「はい。エリュシオンゲートの闇が今朝完全に消えました。早速魂魄妖夢に通信を行ったのですが反応がありません。やはり妖怪に殺されたのだと思われます」
「そうですか…あの子がそんなに簡単に殺されるとは思えないので

すが…」
「これから、第一攻撃隊　ナンバー５　犬走椛、防衛隊　ナンバー４　ナズーリン　以上２名に調査へ向かわせようかと思います。許可を頂けますでしょうか。」
紫は少し考えるそぶりをしたが、すぐに口を開いた。
「所属、ナンバーは問いません。できれば二人、最低でももう一人、人員を追加して下さい。そしてもし魂魄妖夢を倒したと思われる妖怪と遭遇した場合、交戦せず、速やかにコミュニティへ連絡し調査を中止すること。それが条件です」
「ありがとうございます。早速手配いたします。それでは失礼いたします」
レミリアは立ち上がり、部屋を出ようとする。
「待ちなさい」
レミリアの動きが止まる。
「追加人員ですが、一人推薦したい者がいます」
ーーーーーーーーーーー
時刻は１１：４５　作戦準備室に一人。そわそわしながら椅子に座っている。
部屋に窓は無く、天井に設置されている照明のみが唯一の明かりである。
少女は周りの者達と比べると少し明るめの服を着ていた。紺のブレザーにピンクのミニスカート、そして頭に兎の耳を模した様な飾り

を付けていた。
少女は所在無さ気に辺りを見回している。
作戦準備室のドアが開く。
その瞬間、ミニスカートの少女はビクッと体を震わせて、あわてて背筋を伸ばして椅子に座りなおす。
「やあ、君が一番乗りか。…なんだ、集合時間より12分も早いじゃないか」
「こ、こんにちはナズーリンさん」
ナズーリンは「ハハハ」と笑いながらミニスカートの少女の隣に座った。
「お互い災難だね。まさかレミリア隊長に調査隊に指名されるなんて」
「いいえ、ナズーリンさんの能力は調査には必須と言ってもいいものだから当然だと思います。私はなぜ調査隊に選ばれたんでしょうか…はは」
ミニスカートの少女はうなだれていた。
「おーい。なんで現世に行く前から落ち込んでるのさ?」
「ひいっ!」
背後から声がした瞬間、少女は思わず椅子から立ち上がり声の主から距離を取った。
扉は開いておらず足音も無かった。だが2人とも不思議がるそぶりは無かった。

「こ、小町さん、お願いですから背後からいきなり声をかけるのはやめて下さい！　ああ…まだ心臓がドキドキ言ってる…」
「恋かい？」
「ち、違います！」
「泣いてるのかい？目が真っ赤だよ？」
「元からです！」

ナズーリンは「ハハハ」と笑い傍観していた。

小町は悪びれず向かいの席に座り、テーブルに胸を乗せた。

「小町副隊長も調査隊に選ばれたんですか。追加人員があるとは聞いていましたが…」
「うん。なんでかなあ。調査なんてあたし苦手なのに。調査なんてあんたと椛で十分だと思うんだけどね。なんで急に二人も増やすかね」

（ナズーリンさんは事前に聞いてたんだ…今の話だと、最初は椛さんとナズーリンさんだけで調査に向かう予定だったのに、追加人員として私と小町さんが追加されたってこと？　何かあるのかな…妖夢…）
作戦準備室の扉が開く

「遅くなりました。よかった、皆さん揃っていますね。では早速ですがレミリア隊長、お願いします」

そう言うと白髪の小柄な少女は空いていた席へ移動した。座っていた3人は椅子から立ち上がり、最後の入室者を見つめていた。

「椛、ナズーリン、特に小町と鈴仙は急な呼び出しにもかかわらず

集まってくれてありがとう」

４人はレミリアに向かって軽く頭を下げた。

「４人とも知っていると思うけれど、現世に向かった魂魄妖夢が３日前から通信不能になった。エリュシオンゲートは原因不明の闇より使うことが出来なかったが、今朝闇が無くなり通行が可能になった。よって調査隊として貴方達４人に現世へ行ってもらう。…ここまでで異論はあるかしら」

小町が手を上げた。

「すみません。異論とかいうことじゃないんですけど、どうして４人なんですか？調査でしたら椛とナズーリンで十分だと思うんですけど」

「今現世には第一攻撃隊ナンバー３の魂魄妖夢を上回る実力を持つ妖怪がいる可能性があるわ。そこへ魂魄妖夢より劣るナンバーの２人だけでは心許ないということよ」

「ああ、そういうことですか」

小町は納得したようにうなずく。

「あ、あの…どうして私が選ばれたんですか？」

鈴仙は思い切って口を開いた。

「椛さんとナズーリンさんは調査には必須ですし、小町さんはナンバー２ですからわかります。けど何で私何でしょうか」

レミリアは軽くため息をつき、答えた。

「真意はわからないわ。私じゃないの。紫様に推薦されたのよ」
「紫様が？」
「そうよ。そういうことだから観念なさい。他に異論はなさそうね。では概要を説明するわ」

（紫様…ありがとうございます）

鈴仙は安心したような表情を浮かべた。
それを横目にレミリアは４人に一枚の資料を配布した。

「これは…文に作らせましたね…」

ナズーリンが口を開いた。
資料は縦書きになっており、右上には大きな文字で「魂魄妖夢　現世にて行方不明　調査隊の派遣が決定」と書かれている。まるで新聞の一面の様な書き方だった。

「面倒だし時間も無かったからさっき作らせたわ。」

ナズーリンは「ハハハ…」と愛想笑いをしながら資料に目を落とした。
鈴仙も同じように資料を覗き込んだ
内容はこうである。

状況報告
４日前　朝　現世にて妖怪の霊力が感知される。急遽、第一攻撃隊ナンバー４　魂魄妖夢を現世へ派遣した。
４日前　夜　魂魄妖夢から通信あり。今回の妖怪は姿を隠すことに長けており、一掃するには時間が必要だと思われる。とのこと

３日前　夜　定期連絡にて通信が不可能な状態になったことが確認された。速やかに調査へ所属キャラクターを派遣しようとしたところ、エリュシオンゲート内部が闇に覆われており、現世への調査は不可能と判断された。
本日　朝　エリュシオンゲート内部の闇の消滅が確認できた。しかし魂魄妖夢は依然として通信不能状態である為、調査隊を派遣することとした。

調査概要
現世で起きた事象を解明すること。
あらゆる可能性が想定される。適切な行動を行うこと。

作戦概要
本日午後４時　エリュシオンゲートにて現世へ移動。過去の事象を防ぐ為、１０分後エリュシオンゲートを一時的に閉鎖する。
明日午前１０時　エリュシオンゲートを開放。調査隊は速やかにコミュニティへ帰還し、調査結果を報告すること

（妖夢はきっと生きてる。今度は私が妖夢を助けるんだ！）

鈴仙は密かに決意を固めていた。

０７話（後書き）

思い出しながら書いた

０８話（前書き）

ギャグ回ってやつですかね。
いやちがうんですほんと少しふざけたら止まらなくなっちゃって…

08話

河城大型模型店前

衣玖は玄関のチャイムを押した。

「チガイマス」

「！？」

どこからか声が聞こえた。機械的な、まるで音声再生ソフトに文章を入力して再生させただけの様な声だった。

「あの、私ここにくるように言われたんですけど」

インターフォンが付いている様には見えなかったが、一応チャイムに向かって話しかけてみた。

…反応は無い。

「…なに？」

微かな音、いや、声だろうか。背後から何か聞こえたのを感じた。すぐに辺りを見回したが周りには人一人おらず、何も無い空き地が広がっていた。

衣玖は持ち物を確認する。バッグの中には財布と携帯電話、それと鍵のようなものと陰陽の模様の玉が入っていた。

今朝謎の女性が逃げ去った後、机に無造作に鍵と陰陽の模様の玉が

置いてあるのに気づいた。
鍵は妖夢が持っていたものと同じ様な形をしていた。これが幻想の鍵というやつだろうか。これを使えばキャラクターになれるのだろうか。衣玖は想像する。だが…

（これ、どうやって使うの？）

衣玖は使い方がわからなかった。試しに妖夢が光る刀を取り出した時と同じ様に鍵を手にとって「天の帯刃」の名前を叫んだ。（小声で）
だが反応が無い。もっと大声で叫ばなければいけないのかとも思ったが、妖夢が霊体でなければキャラクターになれないと言っていたのを思い出し、思い止まった。そして大声で叫ぶ恥ずかしさと霊体になってしまうのかもしれないという可能性から使うのを思い止まった。

玉の方は妖夢が去り際に手渡していったものだった。通信機らしい。だがボタン一つ無い為使い方が全くわからない。反応も全く無い。
とにかくどうしようもないからいろいろと説明してもらおうと思い、持ってきたのだ。

衣玖は再びドアに目を向けた。
レバー型のハンドルが付いている良く見かけるタイプのドアだった。

「あの、すみませーん！だれかいませんかー？」

ドアをノックして大声で呼びかけてみる。だがやはり反応が無い。
試しにドアノブをひねってみると、抵抗なく回った。どうやら鍵は

かかっていないらしい。ドアをそっと開こうとした。

グッ…ググッ…

開かなかった。押しても引いても開かない。
衣玖はドアが開かない原因を想像する。ドアの向こうで誰かが押さえているのだろうか。開かない様に向こうに突っ張りの役目を果たす物でも置いているのだろうか。そもそも鍵はこれだけじゃなくて、2重、3重にロックされているのだろうか。

衣玖はとりあえずドアノブを定位置に戻したが、違和感を感じた。先ほどはドアノブを下に倒したが、今度は上方向に回してみる。すると、やはりドアノブは定位置を通り越し、回転した。だが…

（ちょっと…何これ！どこまで回るの！）

ハンドルはいくら回しても止まらなかった。2回転、3回転…20回転位した時。

ポロッ

ハンドルがドアから離れた。衣玖はドアハンドル片手に、少し放心していた。

「プッ」
「！？」

（また聞こえた！やっぱり気のせいじゃない。やっぱり誰かの声だ！しかもこの声…）

（わ、笑われてる！？）

「誰かいるんですか！？」

「……」

反応は無い。辺りを見回すが、やはり誰もいなかった。衣玖は頭に血が上っていくのを感じた。

周りを警戒しながらドアノブの離れたドアを観察する。すると小さなボタンが付いている。

衣玖はもう疲れたので、ためらわずボタンを押した。

「ヒミツノアイコトバヲオンセイニュウリョクシテクダサイ」

チャイムを押したときと同じ音質の声が流れる。

「あ、あの、開けてくれませんか？」

衣玖はダメだろうな…とは思いつつ、話しかけてみた。

「エラー　タダシイアイコトバヲニュウリョクシテクダサイ　ナオアト2カイシッパイスルト　バクハツシマス」

「！？」

衣玖はあせってドアノブを地面へ落としてしまった。慌ててドアノブを拾おうとすると、一枚のメモ紙がドアノブの中から見えた。髪を取り出し、広げてみる。

～～～　忘れた時用のメモ　～～～

パスワード
「我は力を求め者なり　時は来た　我の行く手を阻む者よ　今こそ封印を解き放ち我を受け入れよ」（大声で叫ぶこと）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「！」
「エラー　タダシイアイコトバヲニュウリョクシテクダサイ　ナオアト１カイシッパイスルト　バクハツシマス」
「はぁ！？」
どうやら不意にもらしてしまった声もカウントされてしまったらしい。
衣玖は悩んでいた。今までの流れ、また、この合言葉の中二病具合からしてこれはおそらくいたずらだろう。そしてきっと私に恥ずかしいことをさせてどこかで観察しているのだ。
からかわれているのは明白である。ドアノブを置いてさっさと帰ってしまおうか。いやしかし…
「アト３０ビョウイナイニハンノウガナイバアイハ　ヤハリバクハツシマス」
機械音声の方もなんか適当になってきた。衣玖はもう面倒になってきており、冷静な判断能力を失っていた。
（覚えてろ！）
衣玖は本当にいるかもわからない観察者に向かって心の中で文句を言った後、メモ紙を見ながら口を開いた。

「わ、我は力を求め者なり！　時は来た！　我の行く手を阻む者よ！　い、今こそ封印を解き放ち我を受け入れよ！　」

「ドモッタノデエラーデス　モウイチドオンセイニュウリョクシテクダサイ」

「ちょっ！」

「ブフッ」

後ろから噴出すような笑い声が聞こえた。振り返ると”そこ”は周りの景色と少しズレており、何かがあるのは明白だった。衣玖は思わず近くにあった小石を何個か投げつけた。

「うわ！やめ…フフッ！…あ、痛い！ごめんなさフフフ！や、やめて！ちょっと落ち着いて…プスプフフ！」

不意にそこに人が現れた。青い洋服を着た少女だった。背は私より少し小さいだろう。髪はボサボサでサイドテールにしていた。

「わ、笑わないでください！」

「ゴメンゴメフフフフフ…！」

衣玖はボルテージが上がっていくのを感じた。

「と、とりあえず…ふぅ…中に入って…フフ」

そういうと少女は玄関へ歩いていき、ポケットからリモコンのようなものを取り出して操作し始めた。

するとドアが横にスライドした。

（ドアノブ意味無いじゃん！　どういうことなの…）

衣玖は精一杯怒りを抑えつつ、玄関の入り口を無言でくぐる。

「こっちこっち」

少女が手招きしながらすぐ近くにある部屋に向かっていく。
中は土足でいいらしい。衣玖は部屋に行くと、ソファに座らされた。
部屋には用途のわからない機械とダンボールがたくさん置いてあった。

「コーヒーでいいかい？」
「お構いなく」
「まあ遠慮しないでよ。…依姫、よーりーひーめー！ちょっと来てー！」

少女は部屋の外に向かって呼びかける。

（中に人いるんじゃん！）

「私は河城にとり。ここの店長さ」

少女はそう言って向かいのソファへ座る。

「私は永江衣玖と言います。あのここへ来る様に言われたんですけど」
「聞いてるよ。昨日キャラクターになったんだってね」

どうやら話は通っている様だ。

「失礼します」
部屋に女性が入ってきた。薄紫色の綺麗な髪をしている。わたしと同じくらいの年の様だった。
「飲み物適当に持ってきてー」
目の前の少女、河城にとりは言う。
「お邪魔してます」
衣玖がそう言うと、その女性は軽く微笑み、「ちょっと待ってて」と言って部屋の奥へ歩いていった。
しかし初対面なのになんであんなに親しげに微笑んでくれるのだろうか。
「あの子は依姫って言うんだ。2年前にキャラクターになった」
少しすると依姫が缶コーヒーを3本持ってきてテーブルへ置いた。そしてにとりの隣へ座る。
「私は依姫。貴方と同じキャラクターです」
「あ、私は永江衣玖です」
「ふふふ……ふふ…」
「？」
依姫は無言でリモコンの様なものをポケットから取り出して口元に当てた。
「コンゴトモドウゾヨロシク　プププ」

「…どうしたの？…フフ…顔……真っ赤だよ？……プスプス」
「〜〜！」
玄関で聞いたあの機械音声が部屋に響いた。どうやら共犯者だった様だ。依姫はかなり我慢してたらしく、テーブルに突っ伏して笑っている。にとりは普通に笑っていた。何故かものすごい泣きたくなった。
「ご、ごめんなさい。お客さんは珍しいから嬉しくって、つい…」
依姫は素直に頭を下げてきた。お客さんが来て嬉しかったらあのいたずらをしたくなるのだろうかという疑問はあったが、悪気は無いように思えたので怒りが和らいできた。
「ただいま戻りましたー」
「し、失礼します」
玄関から声が聞こえる。
「お、美鈴も戻ったね。これで話を始められるよ」
にとりが言う。声からして、おそらく今朝部屋にいた女性だろう。もう一人いるようだがだれだろうか。
「あ、皆さんおそろいですね」
そう言って部屋に入ってきたのはやはり今朝の女性だった。そして…
「衣玖…」
「マコ！どうして！」

もう一人はマコだった。

「とりあえず座ってくれ。君たちに説明しなきゃいけないことがたくさんあるんだ」

河城にとりは先ほどとはうって変わって真剣な顔で話し始めた。

０８話（後書き）

ケータイ表示してみたら場面切り替えのハイフン多すぎてびっくりした。
過去話に遡って少なくしました。
それはそうと、ちゃんとしたタグ付けた方がいいのかしら

０９話（前書き）

なんか思い出しながら内容をまとめる作業になってきた。

09話

「マ、マコ！何かされたの！？」
「衣玖…違うの」

美鈴という女性が連れてきたマコは、まるで生気が感じられなかった。
うつむいていてよくわからないが、声のトーンは暗く泣き出しそうな声だった。

「あんた！　一体何を」「衣玖！　この人は悪くないの！」

「…ちゃんと、説明するから」

問いただそうとした衣玖をマコが止める。
数秒の沈黙の後、マコが口を開いた。

「私のお父さん、死んだの」

一瞬何を言っているのかわからなかった。冗談かとも思った。

「…朝起きてお父さんに挨拶しようと思ったらね。…お父さん答えてくれないの。何も言わないで近づいてきて、こ、怖くなって逃げ出したら、おお、追いかけてきて！！　い、いきなり血だらけになってばけものになって！！　いやだ！！　やだあ！！」

マコは泣き出した。ココに来る前にも相当泣いたのだろう。目は真っ赤でひどい顔だった。

「落ち着いて、もう大丈夫だから」
美鈴が子供をあやすように背中をなでながらこちらを向いて困ったような笑顔を返す。
マコを見る限り、どうやら
「ごめんね。あまり立ち話をしている時間は無いんだ。とりあえず座ってくれないか？」
にとりが面倒くさそうに話しかけてきた。
美鈴はマコの背中をさすりながらソファへ腰掛けさせた。
私はにとりをにらみつけながら隣へ座る。
「とりあえず今日は帰るわ。明日また来る。いいでしょ？」
「悪いね。急がなくちゃいけないんだ。じゃないと君達まで犠牲になってしまう」
「なに言ってんのよ！　人が死んだのよ！？」
「これ以上死なせる気かい？」
「これ以上って…どういう意味よ…」
いや、本当は聞くまでも無くわかっていた。
昨日の夜まで知らなかった世界。そして昨日の夜の出来事。妖夢は言っていた。
キャラクターになればその力を求めて襲ってくる妖怪と戦うことになると。
朝起きて美鈴が逃げていってから、ずっと考えないようにしていた。
衣玖にとってはまるで夢の様な出来事だった。襲い掛かってくる化け物に剣を持って立ち向かう。飛ぶ。斬りあう。
今考えると恐ろしくて体が震える。

「…君達は今すごく危険な所に立っているんだ。”周りの人たちを巻き込んで”ね」
「…」
「だから最低でも、その危険に立ち向かえるだけの力を付けなきゃいけない。周りの人を守る為には、より大きな力が必要だ」
「でも、気持ちの整理がまだ付いてないし…」

気配が冷たくなるのを感じた。にとりは先程とは比べ物にならないほど怖い目をしていた。思わず目を背ける。

「わかってるんだろ？お前のせいで妖怪が集まって、お前のせいで死んでいくんだ。…このままだとね」
「わ、私はそんなつもりじゃ…」

怖くて目を会わせられない。

「私、キャラクターになる。もう誰も傷付けさせない！」

マコが、はっきりとした口調で言う。先程までの怯えた感じとは明らかに違った。

「マコ…」
「美鈴さんにいろいろ聞いた。昨日のこと。キャラクターのこと。妖怪のこと。大丈夫だよ。全部納得した上で決めたの」

「いやー、話が早くて助かるねぇ。…そうだね。美鈴。彼女をキャラクターにしてやってくれ。地下部屋を使っていいからさ。周囲の警戒は私と依姫でやるよ」
「わかりました。…大丈夫？」

「平気です。よろしくお願いします」
美鈴とマコは部屋から出て行った。
「さて、よっこいしょ。あたしはちょっと頭冷やしてくるよ。何かあったら依姫に聞いとくれ」
にとりはすぐそばにおいてあった変な機械を持って部屋の外へ出て行った。
依姫と二人きりになる。
衣玖はそっと頭をあげて依姫を見た。少しさびしそうな笑顔を浮かべてこちらを見ていた。
「後悔してからじゃ遅いのよ」
「えっ？」
「私はね。2年前、誰一人守ることができなかった。お父さん。お母さん。姉さん。全員妖怪に殺されてしまったの」
にとりが、2年前に依姫がキャラクターになったと言っていたことを思い出す。
「私はね。あのマコって子とは逆なの。力がありながら逃げた。私のせいで妖怪が襲ってきたのに逃げたのよ。勝手よね。」
「・・・」
足音が聞こえる。にとりは「異常なーし」と言いながら部屋に入ってきた。
「どうだい。気持ちの整理ってやつはついたかい？遅くても今日中

には決めてくれ」

「私に戦い方を教えてください。お願いします」

衣玖は頭を下げた。

「選択肢の無い返答を強いて悪かった。頭をあげてくれ」

にとりの声が優しくなる。

「守矢町を守る為には私達3人だけじゃ駄目なんだ。お願いだ。力を貸してくれ」

にとりは衣玖より深く頭を下げた。

ーーーーーーーーー

最初に来た部屋を通り過ぎて突き当たった壁を美鈴さんが軽く押す。すると壁が回転し、下り階段が見えた。

「にとり店長がね。好きなのよこういうのを作るの」

適当な会話をしながら長い階段を下っていく。しばらくすると下り階段は終わり、広いところに出た。

美鈴さんが壁のスイッチを押すと、部屋の全容が明らかになった。

それは巨大な庭、文字通りの箱庭だった。林、岩場、川、滝、青空、自然が一箇所に集まっているみたいだ。

広さは奥行き1キロ程度はあるかもしれない。

いろいろと気になることはあるのだが、今のマコにそのようなことを気にする余裕は無かった。

「マコさん。ココに座ってください」
美鈴さんは岩場を指差した。座るのに丁度よさそうな岩が置いてある。
「いきますよ…目を閉じてらくーにしててください。」
美鈴さんは私の背中に手を当てて呟く
とりあえず言うとおりにしてみる。
数秒後…
「はい、もういいですよー」
「え？」
立ち上がって周りを見回す。すると岩にもたれかかっている自分の体が目に入った。
「得意なんですよこれ。全然苦しくないでしょう？」
苦しいも何も普通に体を動かすのと全く同じ感覚だった。足元見るとちゃんと足は付いているし、近くの物にだって普通に触ることができる。
「それじゃあこっちも」
そう言うと懐から鍵の様なものを取り出した。恐らく幻想の鍵というやつだろう。
美鈴さんは無造作に真上へ放り投げた。

「染めろ…」

美鈴さんは落ちてくる鍵に向かって拳を突き出した。

「極彩華！！」

「うわあっ・・・」

風圧と光で前が見えなくなる。

少しすると風と光が無くなり、目を開くことができた。

美鈴さんは赤い髪になり、黒いチャイナドレスを着ていた。露出度が高く、マコは思わず赤面した。

美鈴さんが片手を目の前に出すと、カラフルな光が集まる。

「わあー・・・」

「この手を掴んで下さい。私の幻想で貴方の力の場所へ案内します。」

「わかりました」

手に触れようとした瞬間、美鈴さんは少し手を引いて口を開いた。

「絶対帰ってきてね。マコ」

「うん。行ってきます。美鈴」

マコは美鈴の手を握り返した。

ーーーーー

「あ、あれ？」

気が付くと図書館のような場所にいた。しかし窓はなく、明かりも薄暗かったので周りが見回しづらい。
だが妙に懐かしい気分だった。

「ちょっと、小悪魔。悪いけど呪術への対抗策に関する文献適当に持ってきて」

一番奥の机に腰掛けて本を読む人の姿が確認できた。さっきの言葉はあの人が発したのだろうか。大きい声ではなかったが、不思議と聞き取りやすい声をしていた。歩いて近づいてみる。
鮮やかな紫色のワンピースを着た女性だった。室内だと言うのに特徴的な帽子をかぶっている。
近づいても気づかず、本を読むことに集中しているようだった。

「あの・・・」
「あら、早いわね。そこに置いといて・・・って何も持ってないじゃない。早く持ってきてよ。適当でいいから」

どうやら小悪魔とは私のことを言っているらしい。
不意に自分が変わった服を着ていることに気づく。メイド服？　・・・いや違う、執事服？

「ちょっとトイレ行ってきます！」

図書館の入り口の近くにトイレがあったはずだ。そこで鏡を見て自分の姿を確認することにした。
紫色の女性は「そう」と小声で言うと再び本を読むことに集中し始めたようだった。

（あれ？なんでトイレの場所なんて知ってるんだろう？）

トイレの鏡の前に立つ。そしてしばしの間言葉を失った。
赤色の髪に、やはり執事の女の子版の様な服でスカートをはいていた。これもメイド服に含まれるのだろうか。
いや、そんな事より背中に翼が生えている。どう見ても天使と言うより悪魔的な翼に見える。頭にも小さい翼が生えていて、尻尾まで付いている。どうやらある程度自由に動かせるようだ。

（なるほど、これじゃ小悪魔なんて呼ばれても仕方ない。・・・もしかして今の私って本当に小さい悪魔なの？）

「こら！　魔理沙！　いい加減にしてよ！」
「落ち着けって。後で返すからさ」

トイレの外で言い争う声が聞こえる。どうやら先ほどの女性ともう一人誰かがいるようだ。慌てて駆けつける。すると十冊程度の本を袋で包んでいる白黒の衣服を着た金髪の女性がいた。
なぜだかその本を取り返さなければいけないような気がする。

「その本返してください！」
「だーかーらー。ちょっと貸してもらうだけだぜ。後でちゃんと返すよ」
「毎回そう言って返してくれないじゃないですかー！　もー！」

（あれ？　前にもこんなことあったっけ？・・・あった気がする・・・）

マコは不思議な既視感を感じていた。

（この白黒の服の人は魔理沙。紫色の人は私の大事な人・・・）

「・・・パチュリー・・・様？」
「？　何よこんな時に」
やはり合っているようだ。どうやらこの世界での小悪魔としての記憶があるらしい。

「魔理沙。ちょうどいい機会だわ。勝負よ」
「いいぜ。私が勝ったらこの本借りていくからな」
「ただし、私じゃなくて小悪魔が戦うわ」
「おいおい、本気かよ」

私？　私が戦う？　どうやって？
パチュリー様が机の中から一冊の本を取り出す。
「小悪魔。貴方なら使えるはずよ。私が使えない闇の魔法をね」
パチュリー様から一冊の本を手渡された。
”グリモワール　オブ　リトルデビル”
本の背表紙にはそう書かれていた。

０９話（後書き）

このままだと物語が一区切りつくのは４０話位になるぞ…どうしよう

１０話（前書き）

サボりすぎた

10話

「ちぇっ。まさかやられちまうなんてな」
「こあだってやるときはやるんですよ！」

ボロボロの私と魔理沙は来客用のテーブルに座って話していた。
珍しく活躍したご褒美にパチュリー様がお茶を入れてくれるらしい。
魔理沙は「今日はここで読んでいくぜ。いいだろ？」と言って本をテーブルの上に置いた。

いい匂いが漂ってくる。

「おまたせ。咲夜がマフィンを焼いてくれたわ」
「わーい」
「なんだ。今日はサービスがいいじゃないか」

ーーーーーーーーーーー

「大分思い出したかしら？」
「…はいです」
「ここは貴方の心の中の世界。闇の魔法は貴方に眠る本来の力を呼び起こしたもの。この魔道書には私が”残すことに成功した魔力”が入っているわ」
「…」

図書館の奥がだんだんぼやけて消えていく。

「小悪魔。好きに生きて。貴方はもう私の使い魔じゃないわ」
「パチュリー様…」

「さて、と。魔理沙、罰ゲームの時間よ」
「な！　お前！　聞いてないよそれ！」
「小悪魔に力を貸しなさい。勝者からの命令よ」
「やれやれ。そういうことならいいぜ」

とうとう周りの本棚は消えてしまい、このテーブルと二人の姿だけになる。

「まずい。時間が無いわ！　早く！」

魔理沙はテーブルに置かれた魔道書に手を置く。パチュリー様も重ねるように手を置いた。

「大丈夫よ。見守ってるわ。それに私達だけじゃない。紅魔館のみんなが貴方を大事に思っているんだから」
「ああ、小悪魔はかわいいからな」

「…できれば友達として出会いたかった…」

意識が消える

ーーーーーーーーー

守矢町の上空に４つの人影があった。

「もしもし、こちら小町。ただいま現世に到着しました」

小町が発光した陰陽玉のようなものを耳に当てて話している。

「こちらレミリア。わかったわ。調査を開始して頂戴。これからゲートを閉鎖するから次は明日午前１０時、こちらから連絡するわ」
「了解しました。では」
通話が途切れると同時に陰陽玉は光を失う。
「全く。いつ来ても息苦しいねぇここは」
小町が言葉とは裏腹に楽しそうな声で呟くと他3人を見渡す。
3人のうち、椛だけが何事も無かった様に立っていた。
鈴仙は息が荒くなっている。ナズーリンは立っているだけで精一杯の様子だった。
「現世出身の鈴仙でもやっぱりここはキツいのかい。・・・やっぱり”圧力”は以前に比べて強くなってるみたいだね」
小町は一人で納得し、頷く。
「心配しないでくれ。少しすれば慣れるさ」
ナズーリンは空中に膝を突いて口を開いた。
「やはりすぐに調査は無理そうだな。小町副隊長、指示を下さい」
椛は小町の方を向いて指示を仰ぐ。
「ナズーリンと鈴仙は少し休んで調子を取り戻してくれ。椛は二人を頼むよ」
「小町副隊長は？」

「ちょっと散歩してくる。少ししたら戻るさ。そうしたら調査を始めようね」
「あ、ちょっと！」
椛が手を伸ばそうとしたが、すでにそこには誰もいなかった。

ーーーーーーーーーー

「パチュリー様！」
「え？パ？・・・？」
美鈴は驚いた様な顔をしていた。どうやらずっと付き添っていてくれたらしい。
「おかえり。無事力を手に入れて帰って来れたみたいね。今はあれから3時間位経ってるわ。
それにしても・・・」
美鈴はマコの姿を凝視した。
マコは心の中の世界の自分と同じ服装をしていた。翼としっぽもある。そしていつの間にか一冊の魔道書を手に持っていた。話によるとついさっきいきなり変化したらしい。
「美鈴さん。ありがとうです」
「もう。美鈴でいいわよ。マコ」
「…ありがとう美鈴」
ふと近くにいる二人の存在に気づく
一人は衣玖。”真っ黒の大きな剣”を重そうに両手で抱えていた。

もう一人は河城にとり。黒いワンピースを着ていて、銃の様な物を数メートル離れた衣玖に突きつけている。

「…駄目だ。話にならないよ。自分の剣もろくに使えないのかい」

にとりはあきれた様に呟く。

「あーあ、どうしてそんなに弱くなったのさ。昨日現れた大妖とはまともに戦えたんだろ？」

マコは昨日の夜の出来事を思い出す。

実は昨日は少しだけ意識があったのだ。

と言っても上手く体を動かすことができず、何とか目を開いて何とか光景を確認する程度だった。

（とにかくだるくて体が重くて意識もおぼろだったけど、衣玖は間違い無く白い大きな剣を持っていたはずなのに…それに…あれはまるで…！）

衣玖は両手で剣を持ち上げてにとりに向かって振りかぶる。

だがにとりは易々とかわし、衣玖は荒い息をつきながらその場にうずくまる。

「昨日のあの子は確かに光る剣だったんだけど、どうしたんでしょうねえ」

美鈴は不思議そうに首を傾げている。

（当たり前だ。”あの能力”は本来衣玖のものじゃない！）

「衣玖！　その剣は斬る為のものじゃない！　その剣は要石！　”貴方”の仕えていた…」

ドン！

不意に轟音が鳴り響き、地面が縦に激しく揺れる。
衣玖の持つ黒い剣の暴走かと疑ったが、特に異常は感じられない。
外に意識を向けると、一箇所に明らかに異常な量の魔力が集中していた。
その場所は衣玖の家…神社だった。

「一体何が！？」
「外でなにか大きな力を感じるんですが、巨大すぎて何がなんだか・・・」
美鈴とにとりは空中に立って話していた。どうやら2人も何が起きたのかはよくわからないらしい。
ふと足が地面に着いていないことに気づく。どうやら自分も空中を飛んでいるらしい。
衣玖は地面に伏していた。

ドガン！

天井が崩落し、この部屋の入り口が岩で埋まりかけていた。
が、美鈴が虹色の光を纏った拳で岩を殴ると砕け散り、再び道ができる。
「こっちだ！早く！」
にとりが叫ぶ。

マコが今の地点から入り口までたどり着くのは、飛べることもありそれほど難しくない。
しかし衣玖の方は揺れが激しいこともあり動くことすらままならない様子だった。

「早くこっちに…あ！　こら！」

にとりの言葉を無視して魔道書を開き、六枚破って衣玖の方に投げつけた。
紙は衣玖の周りを覆い、正方形の黒い色の膜を形成する。
駆け寄ったマコはすかさずその膜の中に入り込む

「あ、ありがとうマコ」
「えっと…」

”この町で友達だった”衣玖になんと言えばいいかわからず、口篭ってしまう。

「とりあえず貴方の家に飛ぶから。話はそれから！」

マコは魔道書から十数枚の紙を破り、四方八方へ飛ばす。
紙は燃え、地面に魔方陣が描かれた。

「飛べ！」

正方形の黒い膜ごと炎に包まれ、消える。
残ったのは焦げた紙くずだけだった。

「嘘だろ…」

にとりが声をかけてから数秒の出来事。
二人は見ていることしかできなかった。

ーーーーーーーーーー

（なにこれ）

路上で衣玖は言葉を失っていた。
目の前には四角形の巨大な穴が開いている。
まるで抉り取られたかの様に神社は無くなっていた。

「やっぱりそうだ！　神社がこの町の核だったんだ！　このままだと町が消えちゃう！」

（マコ何言ってるの？）

さっきからマコが変だ。妙によそよそしいし、言っている意味もわからない。
キャラクターというものになったら性格も変わるのだろうか。
さっき助けてもらったときもよくわからない力を使っていた。

「地べたに座り込んでどうしたのさ」

路地の奥から一人の人影が歩いてくる。

「お、マコちゃんいらっしゃーい。コスプレ？」
「八坂…神奈子！」

マコは魔道書を取り出して神奈子さんを睨み付ける。

「ちょっと衣玖に用があるからさ」
「……」
「ちょっと…どいててくれないかな？」
マコが空へ吹き飛んだ。
飛ばされたマコは一瞬で点になり、遠くへ消えた。
「あんたにはがっかりしたよ。せっかく私が直々に作ってやった剣を扱えないなんてねぇ」
神奈子は衣玖に歩み寄る。
…体が動かない。寒気がする。数々の疑問を口にしようとするが、口さえ上手く動かない。
「仕方ないから返してもらうよ」

体が大きく脈打った気がした。
気が付くと胸に手を突き当てられていた。
いや、突き当てられているだけにしては明らかに腕の位置がおかしい。
体の中に貫通でもしていないとこの位置には…
「あああああ！」
「うるさいねぇ」
ゆっくりと腕が引き抜かれる。

痛みと混乱のなか、引き抜かれる腕がひどくゆっくりと感じられる。
早く手を抜いてくれと心の中で懇願する。
キラリと光るものが引き抜かれる手の中から見えた。
それは細長く、白く光っていた。

（天の帯刃…）

この剣を体から抜かれてはいけない気がする。無意識に抜かれていく腕を押さえようと手を伸ばしたが、上手く力が入らず崩れ落ちる。

「それなりになじんでるくせにどうして上手く使えないのかね。私も見る目が落ちたってことかね。
まあ死ぬことは無いさ。安心しなよ。」

神奈子はあきれたように言い放ちながら剣を引き抜いていく。

「助けてあげる」

声が聞こえた。幻聴だろうか。
目の前を見ると、半分ほど引き抜かれた剣はそのまま自分の体に突き刺さっていて、神奈子は視界から消えていた。変わりに一人の少女が立っている。
容姿はずいぶん幼い。洋風の派手な傘を手に持ち、紫尽くめの服装をしていた。

「この町のヤツじゃないね。お前は誰だ？」
「知らないわ」

少女より向こう側に神奈子が降り立つ。

「キャラクターじゃないね。大妖でもない。ましてやただの人間でもない。お前みたいなヤツが”この町に入ってきた”のは初めてだよ。」
「そう。残念ね。」
少女はこちらを振り返り、胸から生えた剣に触れようとする。
「させるか！」
神奈子は一瞬消えたかと思うと少女の背後に現れ、パンチをしようとした。
腕が消えた。
いや、正確には腕が空中に浮かぶ裂け目に入り込んでいる。裂け目は紫色をしていて、中からは目としか言いようのないものがぎょろぎょろと蠢いていた。
「っ！　この！」
神奈子は慌てて腕を隙間から引き抜き、後退する。
少女は剣の握りに手を触れて怪訝な表情をした後、私の肩に手を置いた。
「やっぱり。貴方が今持っている能力は二つ。だけど干渉しあって上手く使えないはずよ。」
地面に先ほどの紫の裂け目が開き、少女は小柄な体で軽々と衣玖を持ち上げて足を踏み入れる。

やはり裂け目の中では目がぎょろぎょろと蠢いており、嫌悪感を覚えた。

「ちっ、その力はやっかいだね。まあ助けたければ助ければ良いさ。もう衣玖は必要ない」

薄暗い、まるで巨大な生物の体内に入っていく様な感覚がする。
不意に意識が途切れた。

ーーーーーーーーー

「困ったねぇ…」

小町は困っていた。
周囲を偵察していた小町は神社の前に霊力を感じ、少し離れたところに隠れて一部始終を見ていた。
残った一人の姿が消えて、小町はようやく安堵のため息をついた。

化け物が二人。

神奈子と呼ばれるあの人間はこの町の町長として以前から知っていた。だが、普通の人間ではなかったらしい。
しかも並みの力ではない。少なくとも自分一人ではとても敵わないだろう。

そしてもう一人の少女。姿は紫尽くめで金髪のロングヘア。容姿はごく幼い。そして使う能力はまるで…

「あれじゃあまるで”八雲紫”じゃないか…！」

コミュニティの創立者　八雲紫
スキマを開き、人、物を問わずあらゆるものを行き来させるというごく特異な能力を持っている。
武術を得意とし、戦闘では武術にスキマの能力を組み込んだ戦闘方法を用いて戦う。もちろん並みの使い手では足元にも及ばない。
また、非常に冷静で頭が切れ、カリスマもあり尊敬する者は多い。
これが小町の八雲紫に対しての認識である。

以前に一度だけ能力を見たことがある。神社の前で少女が使う裂け目ースキマはその時の光景を彷彿させた。

（だけど…だけど、あんなに気持ちの悪いものじゃなかったはずだ！）

「うーん…」
「おっと」

小町は寝ている女の子を両手で抱えていた。

背中には黒い羽が生えていて、頭にも小さい羽が生えている。無意識なのか、大事そうに魔道書を両手で大事そうに抱えている。特に外傷はない。

「…とりあえず戻るか」

小町は諦めた様に女の子を抱えて歩き出した。

「……」

その後姿を鮮やかな緑髪の女性が見つめていた。

ーーーーーーーーー

気が付くと衣玖は雲の上に立っていた。
目の前には巨大な要石。
その下に衣玖と同じ姿をした女の子が、血溜まりの中心で下敷きとなっていた。

「もしかして…貴方が天の帯刃なの？」
「…そうよ。私は天の帯刃。八坂神奈子様に作られた力。…だけど八坂神奈子様に不要とされてしまった。」

目を開いて辛そうに話し始める。

「どうしてこんなことになったのよ…」
「こいつが悪いのよ！」

いつの間にか要石に女の子が座っていた。
青と白の服に虹色の装飾を付けていて、小さいのに不思議な威厳が感じられる。

「あたしが衣玖の力になろうとしたら想定外だとか言って攻撃してきてさぁ。あたしも正当防衛でしかたなくやったのよ」
「だからってこんな酷いことしなくてもいいでしょ！」
「…本気？」

青白い女の子は意味がわからないと言う表情を浮かべる。

「こいつは衣玖の力を加工して作られた偽者よ。神奈子の息がかかってる。このまま放っておくと何時か必ず裏切るよ。」

天の帯刃を見る。

「その子の言う通りよ。貴方が望めば今の私はいなくなる。…もう疲れたわ。早く楽にしてちょうだい」

天の帯刃は目を瞑り、安らかな表情を浮かべる。

衣玖は天の帯刃に近寄り、手を握る。

「な、何してるの。早く私を消して！　疎まれるのはもう嫌なの、早く！」

「消すとしたら…！」

要石が割れる。大小様々な破片は全て雲を通り抜けて落ちていく。

「消えるのはお前だ！」

そこに立っていたのは天の帯刃を構えた衣玖だった。

11話（前書き）

やっと現世編終わった。

11話

―鈴仙　貴方は優しすぎるのよ―
―私が貴方ならきっと世界を支配しているわ―

「八重斬り！」
「スプラッシュボム！」
「いくらやっても無駄です！　弾け　八咫鏡（ヤタノカガミ）！」

気が付くと地面に横たわっていた。

冷たい。そしてうるさい。目を開ける。
音の正体は雨。大粒の水滴が地面に当たり、砕ける音。

地面に４人倒れている。
４人のうち、２人は椛とナズーリンだと確認できた。
残る２人には見覚えが無い。１人は背中に翼が生えている様に見える。
起きた直後で視界がぼやけていることと大量の雨で、良く見えない。

ドサッ！　「ぐあ！」

空から人が降ってきて、勢い良く地面にぶつかる。
思わず駆け寄る。

「来るな！　生きてる者を連れて早く逃げろ！」

やはり知らない人間だった。跳躍して空へ戻っていく

「あ……！」

空中には3人の人影があった。
一人は小町。大鎌を構えている。もう一人は薄紫色の髪をした見知らぬ人間、小町と同じ様に刀を構えて残る一人に向かっている。

（思い出した…！）

ーーー少し前ーーー

小町が出かけてから椛とナズーリンと鈴仙は地面に降り、休息をとっていた。
だいぶ回復し、（環境に慣れて）自由に動ける様になった時、激しい揺れが襲う。

「ただの地震じゃない…？　少し待っててくれ」

そう言うと椛は周囲を見回す。

「誰だ？あれは」
「どうしたんですか？」
「小町副隊長が戻って来たんだが、知らない女の子を抱えている。それに…」
「？」

椛が両手で四角枠を作り、その四角を覗き込む。
彼女の能力は望遠。数キロ先の光景を見ることが出来る能力である。
数百メートル位ならば建物などを無視して透視することが出来るらしい。

「何だあの女。尾行しているのか？……！　こっちを、見てる！？」

椛が青ざめ、動揺した様子でこちらを向く

「まずい、気づかれた！　お前達早く逃げ…！」

バキッ

鈍く鋭い音がしたかと思うと椛が数メートル離れた壁まで吹き飛ぶ。

「がはっ！」

椛は血を吐いてその場に崩れた。

「見つけた」

「くそ、しくじった！」

緑色の鮮やかな髪をした女性と小町がいきなり近くに現れた。

「あ、やっぱり気づかれてました？」

緑色の髪の女性が上の方の手をかざすと、人の頭程度の大きさはある勾玉がどこからか現れ、その手に収まる。勾玉は椛の吐いた血で染まっている。

「くそ…こいつらやっぱりヤバい！　お前達早く逃げろ！」

小町が抱えていた女の子を私の方に放り投げて、ナズーリンと私に向かって叫ぶ。

「あ…あ…」
「ちっ！」
ナズーリンが椛を担いで、一時停止した私の手を引いて走り出す。
「逃げるよ！　自分で走れ！」
はっとして女の子を落とさない様に抱えて、全力で走る。
「鈴仙！　悪いけど椛も頼む！」
ナズーリンから椛を受け取り、両脇に抱えて走る。
ナズーリンはどこからかロッドを取り出し、前方に構える。
ナズーリンの能力は探し物を探し当てる能力。
ロッドを使用して、人、物、場所など区別無く探し当てることができる。
「やっぱりだ！　この近くにその子の仲間がいるみたいだ！　とりあえずそこに向かうよ！」
「でも敵の可能性も…」
「そんなこと言ってられるか！」
ーーーーーーーーーーー
「はぁっはぁっはぁっ」
ナズーリンの誘導にしたがって突いた先は崩れたビル。
鈴仙は2人を降ろして、崩れるようにその場に座り込んだ。

椛の霊力が急速に弱まっていくのを感じる。
早く治療しないとこのままでは死んでしまう。

「見ていました」

ビルの前にいる薄紫色の髪の女性がこちらへ近づいてくる。

「そして、やってくれましたね…」
「え？…なっ！」

小町と緑色の女性が近くに現れた。

「へぇ。ここだったんだ。ずーっと探してたんですよ？」
「八坂早苗…！」

どうやら顔見知りらしい。

「へぇ…そんな顔をしてたんだ。他にもお仲間さんいるんでしょう？」

顔見知りというわけでもないらしい。

早苗の背後に長身の女性が音も無く出現する。おそらくあの薄紫色の髪の人の仲間だろう。どうやら攻撃を仕掛ける気の様だ。

拳による突きが当たったと思われた瞬間、攻撃を仕掛けた人間の腕が吹き飛んだ。
よく見ると、早苗の後ろには光る円形の鏡が浮かんでいる。

「な…に…」
「映した攻撃を跳ね返す八咫鏡です。面白いでしょ？」
早苗は無表情のまま振り返って言葉を放つ。
長身の女性は肩を押さえて飛び退く。
（今だ！）
私は目を大きく見開く。
「狂気の瞳…でしたっけ？」
背後から声がする。その声に反応して思わず振り返ってしまった。
目に入った姿は自分自身。赤い光が視界を奪う。
意識が消えた。
ーーーーーーーーー
「そうだ。私あの人にやられて…！」
戦闘はまだ続いている。
どうやら気を失っていた時間はそう長くなさそうだ。
早苗の力は3人を圧倒していた。
異常な程素早い高速移動と、奇妙な形の剣での斬撃。
大量の雨が降りしきる中、早苗は少しも濡れている様には見えない。
早苗の周りを浮かぶ勾玉は不規則な動きで3人に襲いかかる。
「ハッ！」

薄紫色の髪の人間が勾玉の攻撃を突破し、炎を纏った剣で早苗に攻撃を仕掛ける。
が、鏡に攻撃を反射されて後退する。
休む間の無い３人に疲労の色が見えた。

辺りを見回す。

（…あれ？）

椛と返り討ちにされた長身の女性が横になって倒れている。
椛は息はあるようだが、もう戦うことは難しいだろう。長身の女性の方は生きているかも怪しい。

（ナズーリンともう一人は何処に行った？）

ーーーーーー

「水符『プリンセスウンディネ』！」
「なっ！？」

早苗の周りに無数の光弾が発生する。さらに早苗の下方向から高速のレーザーが出現し、早苗のいる方向へ伸びる。

「この…！　…何！？」

早苗はかろうじてレーザーを剣で弾いた。
無数の光弾は消える気配が無い。

「出て来い！　どこに隠れている？」
早苗は周囲の気配を探る。
背後に一つの霊力を感じた。
「そこだ！　…っ！？」
早苗は振り向き、そして前方に勢い良くつまづいた。
「やっぱりね。壊してきましたから。怪しい結界全部」
「くっ……バレちゃったみたいですね・・・！」
そこにいたのはマコ。魔道書を片手に携え、空中に立っている。
勾玉は地へ落ち、鏡は掻き消えた。
「貴方の高速移動も再現能力も、あらかじめ仕掛けた結界のおかげでしょう。もう怖くないです」
マコは早苗を睨み付ける。
「東風谷早苗、質問に答えてください。守矢は一体何をたくらんでいるんですか？」
「守矢？　東風谷って、私のことですか？」
早苗は本当にわからないといった表情で聞き返す。
早苗は一瞬の隙をついて光弾の群れから抜け出そうとした。
「動くな！　水符『ミチズレウンディネ』！」
早苗の周囲に光弾はさらに密度を増し、さらにその周りをレーザー

が旋回する。

「逃げようとしたら潰します。質問に答えて！」

「容赦ないなあ。マコちゃんてば」

早苗は構えを解く。

「驚いたなあ。マコちゃんの能力は水属性の魔術ですか。力量も能力も予想してたよりずっと強いですけど私の敵じゃない」

「く、この！」

マコは魔道書から8枚のページを破り、早苗へ飛ばす。

「なっ！　何これ！」

早苗に飛ばされたページの内、４枚は左手へ。もう４枚は右手の周りで回転し、黒い輪となる。

そして早苗の意思とは無関係に両手を頭の上で交差させた。手にしていた剣は地面に落ちる。

例えるなら両手をロープで縛られて宙吊りにされた様なポーズになり、足をバタバタさせる。

「闇火府『トカマクブレイズ』！」

早苗の周りに炎の輪が発生した。

炎の輪はぐるぐると回転を繰り返しながらどんどん小さくなり、早苗に迫っていく。

「うそ…なんで”なりたて”にこんな力が…！？」

「言え！　守矢は何をたくらんでいる！　何でみんなの記憶を奪った！　何が目的だ！　言わなければこのまま攻撃する！」

ーーーーーーーーー

「鈴仙、無事か！」

「小町さん、すみません私しくじってしまって…！」

空で戦っていた3人が降りてくる。

「あの子もあんたらの仲間かい？　…なんだいあのメチャクチャな能力…」

「そうですけど…今日初めて目覚めさせたはずなのにあんな…」

「何…だって？」

小町と一緒に鈴仙も驚愕する。

（あの子が今日初めてキャラクターになった？　それであの力？）

「とにかく、今のうちに急いで応急処置をしないと！」

「あ、それなら」

鈴仙は地面に寝かせていた2人を指差す。

「椛さんは内臓がかなりやられていますが、命に別状はありません。赤い髪の方も命に別状はありませんが腕が治るかどうか…」

青い洋服を着た女性（鈴仙が起きた直後落ちてきた女性）が片腕を押さえて歩いてくる。

「美鈴まで…ありがとう。出来れば私も止血だけでもお願いできるかい？」
「はい！　損傷部を見せてくださ…」
止血だけでもと言った意図が判明する。片腕が無かった。鈴仙は無言で手持ちの救急箱から包帯を取り出し、腕のあった箇所に巻きつけた。
「私もあの子の援護を！」
「やめときな」
「駄目だ。行くんじゃない」
「無茶です」
3人全員に反対されて、鈴仙は少しうなだれた。
「よかった、間に合った！」
ナズーリンが駆け寄ってくる。
「やっと見つけたんだ！もう一人の味方！」
その後ろには金髪の幼い女の子が立っていた。
（誰だ？）
鈴仙は困惑する。薄紫色の髪の女性と青い洋服の女性も同じ様な表情を浮かべていた。
「あ、八雲紫のニセモノ！」

「貴方は私を知っているの？」

小町は紫色の金髪の女の子に指を指して言った。どうやら面識があるらしい。

「こいつは八雲紫みたいにスキマを使えるんだ！」

（そう言われれば…）

どこと無く似ていた。八雲紫を幼くして女の子らしくしたらこんな感じになるような…。

（けれど私達とは違う、黒ではなく紫の衣装を着ている…）

「ねえ。貴方は私を知っているの？　さっき目覚めたばかりでよくわからないのよ」

「なんだって？　さっき、目覚めた？」

どうやら小町の言葉に反応したらしい。紫色の女の子が興味深そうに小町に尋ねる。

「ずっと暗い所にいた。気づいたらこの世界にいたの」

「そんな馬鹿な。それならおかしいじゃないか。八坂神奈子にやられてたあの子を助けてただろ。目覚めたばかりで何もわからないって言うなら、どうしてあの子を迷わず助けたんだ？」

「あの子は特別。真っ暗の中、感情の薄れていく私はあの子の感情だけは感じることができた。そのおかげで私は感情を失わずにいられた。その恩返し」

「何を言って…」

パン！

何の前触れも無く、空がまばゆい光で覆われた。

ーーーーーーーーーー

「無事かい？　早苗」

「神奈子様…」

早苗を抱きかかえた神奈子が姿を現す。

「そんな…私の魔法が…」

「残念がること無いさ。あんたを甘く見てたよ。大した威力だ。ただ”私の結界の中”では簡単に打ち消せるけどね」

（そんな、結界は一つ残らず壊したはず！？）

マコは周囲に結界が無いか気配を探る。

「どこにあるか教えてやろうか」

神奈子は地面を指差す。

「何をふざけて…」

「ふざけてなんか無いさ。気が付かなかったみたいだねえ。この町全体で一つの巨大な結界なのさ」

「な…に！」

気配を辿ると確かに町全体から気配を感じた。

「なーに、すぐ消してあげるよ。　…この町もあんた達も全部一緒にね！」

ドドドドド！

町全体が揺れる。

地面だけではない町全体の空気が振動するのを感じた。

「せいぜいもがくがいいさ。この作り物の町で」

「待て！」

神奈子達の前に赤い光を放つ四角い入り口が現れる。

「じゃあね」

神奈子は入り口に入り、すぐに入り口は消えた。

「あれ？」

足の踏ん張りが利かない。揺れているせいだと思い手をつこうとしたが、手さえ動かない。意識が薄れていく。

マコは地面に吸い込まれる様に崩れ落ちた。

雨は止み、不安定な町を嘲笑うかの様に青空が広がっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3554w/

東方魂劇場

2011年11月17日20時25分発行